
護ル為ノ | 剣《チカラ》

redehyes

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

護ル為ノ剣^{チカラ}

【Nコード】

N8016P

【作者名】

red eyes

【あらすじ】

この学校は三部に分かれていてとても有名な学校だった
この学校は剣士、魔道士、武道家の3つに分かれそれぞれの道を決める

そして6月の6日に控えられた新人戦がすべての始まり…
始まるのは信じられないような恐ろしい事件の数々
始まるのは信じられないような恐ろしい怪奇の数々
そんな、おとぎ話のような不思議な事が主人公をおそう

今、運命の歯車が動き出す!!

第壱ノ章「プロローグ」(前書き)

初めましてred eyesです

今回初めての投稿となりました

下手くそですが見てくれると嬉しいです

また、残酷な表現もありますに一応しるしをつけました

バトルものなのでもしかしたら残酷な表現をしてしまうかもしれないのでそういうのがお嫌いな方には気に入ってもらえないかもです
一応きをつけますが…

では、本編を見てください

プロローグ少なくてすみません…

第壱ノ章　プロローグ

第壱ノ章　プロローグ

白馬に乗った王子様

それは、小さいころに女の子たちが夢に見るものだ
絡まれてる女の子をかつこよく助ける

それは、小さいころに男の子たちが夢に見るものだ
他にもお嫁さんとか社長とか野球選手とか色々なものに憧れる
でも、成長することによって少しずつその夢は薄れていく
大人になるころ……15歳くらいになれば現実と向き合うことになる
自分の実力ですべてを決めていくことになるだろう
夢は夢、現実が現実……これは大人になるにつれて少しずつ分けられ
ていくものだと思う

白馬に乗った王子様そんなのは現実には存在しない

少女はそう思っていた

ほんの数分前までは

「何すんのよ!!」

「いいじゃん、遊んでこうじゃん？」

少女は3人の男に囲まれていた

「そうだよ、遊んでこうぜ、悪いようにはしないからさ」

「そういうのすごく信じられないんだけど？」

少女は囲まれていてもなお腕を組み仁王立ちしていた

「めんどくせえな、もうさらってこーぜ」

「そうする？こんな上玉そうそういないぜ」

男たちが相談を始めた

「……………」

少女は3人を睨んでいた

その間少女は逃げる方法を考えていた

少女は昔に拳法をたしなんでいたがさすがに体格的にもう敵うわけがない

「ちよつと…ピンチね」

少女は3人に聞こえないような声でつぶやいた

「よし!!」

3人の中のリーダー的な奴が少女を見て

「つれてこーぜ、このままさ」

そういうと残りの2人は頷いて少女の腕を片腕づつ掴んだ

「っ!!!!!!!!!!」

少女は抵抗しようと思ったがやめた

少女にだって力の差が分らないわけではない

むしろ、連れて行かれるにしても連れていかれ方というものが自分の中にあるんだろう

「なんだ抵抗しないじゃん？」

「満更でもないんじゃない？」

男たちが口々に適当なことを言う

「……………」

少女は下を向きながら震えていた

別に怖いわけではない

泣きたいわけでもない

少女はただ単にくやしかっただけなのだ

こんな風に理不尽なことに立ち向かえないでいる自分を自己嫌悪していた

「へへっ、じゃあ——」

男の声が不意に止まった

すると続けて

「てめえ…誰だよ!!」

少女は顔を上げた

そこには

「てめえら、うるせえよ」

少年が立っていた

少年はしっかりとした顔立ちで体格は暗くてよく見えないが筋肉体質ではないだろう

「なんだよ、やるっていうのか？」

男たちの雰囲気が変わった

「やるってんなら容赦しねえぞ？」

男たちは少女から手を放し今度は男を囲んだ

「真夜中に騒いでるてめえらがいけねーんだろ？」

「あんだと?!」

男たちは完全に切れていて話で通用するような状態ではなかった

「お前みたいなチビひよろひよろが俺らに勝てると思ってるのかよ？」

「わらわせんなよ」

男たちは下品に笑った

すると、少年は鋭く睨み鼻で嗤^{わら}った

それが勘に触ったのか男たちの一人が少年に殴りかかった

少女は目を瞑った

少女から見ても少年が勝てるようには見えなかった

鈍い音がした

少女は恐る恐る目を開けるとそこには少年が立っていた

床に寝そべってるのはさっきの男たち

全員気を失っていた

「なにしてんだ？早く逃げろよ」

「え？」

少女は突然のことで驚いて声が出せなかった

「え？じゃなくてさ、こいつらは俺がどうにかするからとりあえず逃げろよ」

少年はそう言つて3人の足を掴み引きづりながら歩いて行った

少女は無意識だったのか少年の前に立ち言った

「お礼したいんだけど？」

少女がそういうと少年は少し微笑んで

「いらねえよ、俺は喧嘩しただけだ」

そう言っただけ少女の横を通り過ぎて行った

少女は少年とは反対のほうを歩きながら言った

「私は、綾瀬 あやせ 希海 のぞみ」

すると、足音が止まりゆつくりと少年は言った

「俺の名前は九十九 つくも 海人 かいとだ」

少年は名乗るとそのまま歩いて行ってしまった

少女はそのまま少年と反対の道を走り抜けていつもの自分の通っている学校の道についた

時間は2時半

かなり真夜中

何故少女がここにいたのか理由は簡単だ

少女は学校に忘れ物をした

別に明日でもよかった

でも、少女は立場上忘れるのが嫌だった

そのため自分一人で来たのだ

そしてついでにいつも見れない裏の道を使ったらこうなった

少女はゆつくり空を見上げて言った

「ホントに、世界は決定的に理不尽ね」

これが、二人の出会い…

まるでおとぎ話のようなタイミング

まるでアニメのようなタイミング

歯車が動き出す

壊れた時計のように

‘ プロローグ END ‘

第貳章　出会い（前書き）

こんにちわ red eyes です。

新年あけましておめでとうございます。

今回は、少し長めで書かせていただきました。

まあ、前書きで特別にお話することもないので本編のほうをじっくりとみてください

第貳章　出会い

第貳章　出会い

この世には、無と有がある。

それと同様に、生体と死体がある。

ある少年が言った。

『なんで君は包帯をしてるの？』

質問された少年…いや年齢としては青年だろう。

その青年は自分の包帯を触りながら言った。

『別に、理由はないよ』

少年は聞いた。

『だったら邪魔じゃない？』

青年は、少年の頭の上に手を置いて言った。

『君もいつかわかるよ…自分の…本当の味方はだれかって』

青年は去って行った。

いや、消えたというほうが正しいかもしれない。

突然、あらわれ突然消えた。

少年は青年の言ったことが分からなかった。

＜入学＞学校前＞

こつようだい「えいきょういくがっこう」
黄葉台護衛教育学校。

ここは、剣士、魔道士、武道家の3つに分かれてそれぞれの腕を上げる学校だ。

その中でも最近人気なのが魔道士だ。

基本的にここに入学するの人たちは、基本的な武道はやってはいってくる。

しかし、魔法というのは特別な環境でしかできない。

なので、全員魔法に行ってしまう。

ただ、この学校では希望すれば必ずというものではない。

魔法といってもそれに適応した『エーテル』という魔法原動力が必要だ。

基本的には誰もが生まれながら持っている。

特にここに入学するものはみんな生まれながらの『エーテル』の量は他の人を超越する。

しかし、だからと言ってみんなを魔道士にしてしまえば剣士と武道家に人が来なくなってしまう。

なので、ここでは一定量以上の人のみが魔道士になれる道を選択できる。

ただ、近年だんだんと『エーテル』をその一定量まで持たない人が多いらしい。

その辺は追々分かっていくだろう…

この、黄葉台護衛教育学校ではもう一つ最大の特徴がある。

それは、実践戦闘訓練があるということだ。

普通の学校では、本物の刀や銃それから鈍器などを持って戦いあったりしないだろう。

しかし、この学校ではあくまで『護衛する為の技術を学ぶ』為に来る所だ。

たまに自分の腕を磨きたいがために来るやつもいるらしいが、長く続かず早急に学校を辞めると聞く。

黄葉台護衛教育学校では実践戦闘も行うがおもにそれは大きな試合で用いることが多い。

この学校では、訓練でも本物の武器を使ってもいいが基本的にみんな大きな試合が控えているので訓練では偽物が多かったりする。

ただ、大きな試合の時は別で、春の新人戦、夏の夏火戦、秋の秋暁戦、冬の冬凍戦。

この4つの試合では本物の武器を使い戦う。
試合はまず3ブロックに分かれる。

剣士、魔道士、武道家。

この3種で1ブロックずつ戦い上位4名が第2試合に上れ
その、第2試合では3ブロックの選ばれた上位でタッグを組み全部
で6チームで試合をする。

基本このチームは剣士は剣士の4名で1つのチームを作る場合が多い。

極稀に他の学部と手を組みタッグを組むこともあるらしい。

そして、この第2試合で勝ち残った1ペアが優勝となり勝ったチームの学部の人たちには次の試合まで大目に資金がきたりと次の試合まで色々困ることなくなる生活が続く。

逆に負けると、資金は多少減り次の試合まで色々狭苦しい思いをすることになる。

ここはエリートの為の学校…

つまり、ここには必ずみんな何かしらの異能があつたり得能があつたりする。

たとえ…それを、隠そうとしても…

「ここか…」

海人はまじまじと校門を見ながらつぶやいた。

校門にはでかかと

『黄葉台護衛教育学校』と書かれていた。

九十九 海人^{かいと}17歳。

この物語の主人公。

健康的な肌に紅蓮の眼そしてなにより一番の特徴が…

「よっ！チビ助」

海人の頭をたたきながら声をかけてきたのは朝日^{あさひ} 浩太^{こうた}17歳。
主人公の昔からの旧友だ。

浩太は海人と違い真っ黒い肌に黒い目それから超がつくほどの筋肉
体質。

その為背は今年で198?を越したとか何とか。
ちなみに、主人公の背は155?。

歳にしては背がかなり低い。

「いい加減俺の頭から手をどかせ」

海人はそう言いながら大股で学門をくぐった。

「まあ、ピリピリすんなってホントにぎよめんよ」

浩太は『噛んじゃった…テヘッ』とか言いながら気持ち悪くついて
きた。

「なあ、返事くらいくれよ」

海人はとりあえず浩太を眼中に入れずにそのまんま歩き続けた。

少し歩くと浩太が後ろから

『修業がたらののか!!』

とか言いながら何かをたたく音がした。

とりあえず基本的に浩太を無理してそのまんま下駄箱に来た。

(しかし、1年の靴はどうするんだ?)

少し昇降口で立ち止まっていると、

「久しいね、海人」

眼鏡をかけたいかにも理系そうな男が立っていた。
せきぐち つとむ

関口 励17歳。

励は、背が少し高く179?で茶色い目に少し青い髪をしていてい
かにもインドアという感じの人物だ。

励も海人とは昔からの付き合いである。

昔といってもそんな昔ではない、ほんの3年前だ。

実質海人も浩太も励も出会ったのは13年前になる。

ちなみに黄葉台護衛教育学校で3つの学科があるが海人も浩太も励
も一応全員魔道士に立候補したのである。

「で?俺ら3人は仲良く魔道士行きか?それとも誰か省かれたか?」
海人が励にそう言うと励は

「一応全員魔道士に合格してはいるが…」

励はなんとなく言いくそうにしている。

「どうした？頭でもいかれたか？」

海人のボケに高速で「いかれてねーよ」と突っ込んだあと真剣な顔つきで励は、

「それが順位が可笑いなんだよ」

「は？」

順位…それは、テストでその結果が張り出されるようなものである。これは入学当初の身体能力を数値化し張り出したものだ。

「で？どこが可笑いなんだ？」

海人が励に言っていると励は上のほうを指さし言った。

「九十九海人は特待生だよ」

「はあ?!」

海人は驚いて紙を見た。

そこにはでかかと書いてあった。

特待生 九十九 海人

そのあと、教室に3人で行きつまらない担任紹介とHRがあった。

（HR終了後）

海人は机に突っ伏していた。

正直訳が分からなかった。

特待生と言っても、これまで海人は全く真面目に勉強すらしてこなかった。

「海人が特待生扱い…なんかすげえな」

浩太は海人の前のにやにやしていた。

「俺は何にもしていない、それに魔力数値だって3桁すれすれだ
励や下手すると浩太の方が高いんだぞ？」

海人は浩太の頬を右から左につねりながらそう言った。

励は「確かに数値だけみればな」といい顎に手を当てて考え始めた。

「ちょ…いたつ…ごめ…ほ…ん…と…いて!!」

浩太は声になつてんのかわからない声で助けを求めた。

しかし、それを励は無視して、

「昔の業績はないな、とりあえず、あんまり言いたくはないが

海人は褒められるようなことはしてないし悪いこともしてない

それに、ここに来る前の学校ではお前は学年で最下位だったしな

正直、いきなり特待生はありえなさすぎる」

励の意見は尤もだ。

海人はこの学校に入学が決まる前の学校では学年最下位の成績だった。

もちろん、そこでも護衛に関する授業がメインの学校で授業のほとんどが訓練だった。

「一つ聞きたいんだけどさ…海人」

励は海人に真剣かつ真面目な態度で言った。

「海人さ…今まで訓練でも本気だしたことないよな？」

海人は浩太の頬をつねるのを止めて立ち上がり「さあな」と言つて立ち去った。

残された二人はその立ち去る海人を呼び止めることができなかった。

（13年前）

「てめえ…また、こぼしやがったな？」

そう言われ少年は何度も殴られた。

少年は誤り続けた。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい
ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

何度、謝ってもその暴力は止まらなかった。

少年は最初こそ泣いていた。

ただ、泣くと必ず「うるせえ」と殴られた。

いつしか、少年は泣かなくなった。

すると、そいつは今度「生意気な餓鬼だ!!」と言って殴った。

それでも、少年は泣かなかった。

泣かなかったんではないかもしれない。

少年は泣くことが出来なくなってしまったのかもしれない。

少年はいつしか声を出さなくなった。

何か言うことで「五月蠅い」と言われ殴られたからだ。

殴られても少年は逃げなかった。

何故か？

それは、少年がどこかで思ってたんだと思う。

『もう一度：あの頃の輝いていた父さんが見たい』

少年の父親は昔ボデイガードだった。

しかし、ある任務で大きな失敗をして退職になった。

退職になる前の父親は少年の憧れだった。

少年の父親は必ず少年に言っていた一言があった。

『お前が生まれたとき、お前は泣いて俺らは笑ってた

本当にうれしかったからな

：でもさ、お前が死ぬときは、お前の周りが泣いて

お前が笑えるような人生を送れよ

例え、どんな困難や挫折があってもそれをお前は忘れるな』

少年はこの言葉を何度も聞かされた。

毎日、毎日聞かされ少年は飽き飽きしていた。

それに、少年はその意味がわからなかった。

でも、少年はそんな父親に憧れその職に就きたいと思った。

でも、現実には甘くはなかった。

父親の失敗によりまず最初に少年は家を失った。

そして、次に友達を失った。

そして、次に母親を失った。
そして、次に義妹を失った。

そして極めつけは憧れの父親すら失った。

少年は何時しか自分の父親のところを抜け出し公園にいた。
理由なんてなかった。

ただ、いたかった。

ただ、一つだけわかるのが、少年は公園に来たのに遊ばず
ただひたすらに木陰で泣いているということだけだ。

一体、いつぶりの涙だろう。

少年自身自分が何時泣かなくなったのか分からなかった。

それに、少年は泣き方も忘れてしまった。

どうすればいいのか、どうなけばいいのか。

実際泣き方なんてない。

でも、少年には普通ならわかる『子供の泣き方』がわからなかった

少年はそこで涙が枯れるくらい泣いた。

気づくともう夕暮れだった。

少年は涙を拭いまたあの家に帰ろうとした。

その時、少年の前には3人の子供がいた。

自分と大して歳の差もない少年少女。

男の子2人に女の子1人が走り回っている。

少年はその姿を見て懐かしいと思った。

少年が立っていると突然その中の女の子がこっちに走ってきた。

女の子は言った。

「いつしよにあそばない？」

少年はどうこたえていいのかわからなかった。

少年が下を向いてると残りの二人も寄ってきて。

「なにやってんだ？はやくつづきやろうぜ」

「そうだよ、つづきしよう」

二人の少年は少女に言ったが少女は首を横に振り言った。

「みんなであそんだほうがたのしいよ」

そう言つて少女は少年に手を伸ばした。

少年はすぐそれが眩しかった。

少年はその手を掴もうとした。

しかし、掴むことはできなかった。

少年は体中ボロボロで正直立つのすらやつとだ。

歩くのも喋るのもどこかしらの体の一部が痛くなる。

そんな状態で走ったりできるわけがないと思つた。

少女はそんな少年の手を見て言つた。

「きづだらけだけど、きれいなてだね」

少年の手はお世辞にもきれいとは言えない。

傷だらけだしそれに泥だらけだ。

でも、少女はそれでも『きれいなて』だと言つた。

少女は、少年に言つた。

「あなたのてはとてもきれいです」

ほんとうに？

少年は声にならない声で言つた。

「うん」

でも、きずだらけだよ？

少年の問いかけに少女はこつ言つた。

「だって、まるで――」

『おひめさまをまもるおうじさまみたいなてをしてるんだもん』

これは13年前のお話。

子供が子供でいられる最大の時間。

それは、限られている。

時間は限られていてそれでいてその時間は短い。

時間を作った人は偉大で、どこまでも優秀かもしれない。

でも、時間を作った人たちはある意味残酷なことをしたのかもしれない。

〈教室〉

「海人が本気をだしてない…か」

浩太はどこか遠くそれでいて近い女子の太もを見ながら言った。

「浩太は残念だな」

励は、浩太の視線の先を一度見てそのあとため息をついて言った。

「浩太、一つ言っとくとさ」

ここは前みたいな普通の女子は通ってないの！！

ここにはお嬢様とかご令嬢とか超有名人が付く女子も一緒に通ってるんだぞ？

だから俺らがいるんだわかるか？」

励は、わざと浩太の視線の先が見えないような位置に立った。

「そうかりかりすんなって

カルシウム足りないなら俺のプロテイン一本やるぞ？」

浩太は自分のバッグからプロテインをとりだし「おまち！！」と元氣よくだした。

「カルシウムは足りてるわ！！」

2人で話していると突然。

「なんや？喧嘩かいな」

励は吃驚して後ろを振り向いた。

すると、そこには1人の女子が立っていた。

「そう警戒しなさんな

怖くて、うちしんでもーてしまうやろ」

突然の出現に一番おどいていたのは励で浩太は…

「なあ、その…」

「笹岡 梓乃ささおか しのや」

浩太は「おお」と言いながら今度は梓乃に視線を送った。

笹岡 梓乃 笹岡財閥の令嬢ながら気配を消す天才と言われている人。

見た目は、ショートで少しオレンジがかかった髪に健康そうな肌。

そして、1番の特徴は言葉になまりあるということ。

梓乃自身は気づいていないらしい…

「まあ、喧嘩するんはいいけどな

とりあえず、特待生はどこや？」

梓乃はわざとらしくきよるきよるしながらそう言った。

励は梓乃のことを一切見ず椅子に座り瞑想していた。

励はある意味悔しかったのかもしれない。

今まで訓練してきたのにここにいるお嬢様の気配すら気づけなかったことを。

「で、梓乃さんだっけ？」

「梓乃でええよ」

「ほう、では、梓乃よくお前もお嬢様なのか？」

梓乃は少し頭に手を置いて考えてから「一応、おぜうやね」と言った。

「おぜう？」

「おお、すまん、すまん堪忍なおぜうっていうんはお嬢様のことや」
その言葉を聞いて浩太は「じゃあ、もしかしたら俺らの護衛対象者になるかもだな」

そう言ってくるくる回り始めた。

「浩太はん？いきなりどうしたんや？」

「いきなりでもないぜ まわりたいんだぜ」

「浩太は基本が馬鹿だからな」

浩太がくるくる回り始めたと同時に励は目を開けていった。

「かい…特待生なら校長室にいった」

励はそう言つとまた椅子に座り直し瞑想にはいった。

「おおきに、じゃあうちは校長室いくわ浩太はんも回りすぎんようきーつけや」

そう言つて教室から出て行つた。

「190∴191∴192∴191∴つてあれ?∴そうだ!」

浩太は突然回るのをやめて励に振り返つた。

「励、あいつなんでこのクラス来たんだ?」

励はゆっくり目を開けて言つた。

「しらん!」

「校長室」

「で?俺が特待生の意味を教えてくださいよ!」

海人は校長室にノックもせずはいりいきなり怒鳴つた。

「そう怒るりなさんな」

校長は紅茶を飲みながら言つた。

「なんで、俺を目立たせた?」

「カルシウム足りてるのか?」

この学校の校長は最近着任したばかりだから相当若い。

噂によると二十歳になり立てだとか違うとか…

「俺はお前と約束したはずだ」

海人は校長の前に立つて言つた。

「俺は魔法科に——」

「それ以上は言うんじゃないよ!」

校長は海人に一括した。

校長は静かにカップを置くと、言つた。

「海人、お前に会わせたい人がいる」

「会わせたい人だと?」

海人はため息をつきながら校長室についてるソファに腰を掛けた。

「そうだ、お前に——おっと、来たか」

校長が言いかけたところで静かめのノックがした。

「はいりな」

「失礼します」

そこにいたのは海人にとって懐かしい人物だった。

髪は腰あたりまでであり黒い髪に黒い瞳それからこの礼儀だだしさ。

「麗華か」

それは、新たな出会いだった。

そのころ梓乃は、校長室の扉の前にいた。

「おもしろいやないか…」

少しずつ、壊れた歯車が…

動きだした…

第参ノ章ゝ閉ざすはコロコロ開くはミライゝ（前書き）

こんにちは!!

みなさんお久しぶりです!!

今回から少しずつ自分の描いていたものにしようと思います。
でわ、本編です。

第参ノ章　閉ざすはココロ開くはミライ

第参ノ章　閉ざすはココロ開くはミライ

　　14年前

「にいさま、にいさま、にいさま」

「なに？」

「にいさまあのさ」

「だから、なに？」

「えっとね、にいさまこのおはなしかせてほしいの」

「いいよ、じゃあそこにすわって」

「…それとね…いつもみたいだね、……ざ…くら、してほしいの」

「ごめん、きこえなかった」

「えっとね…ひ…ま……してほしいの」

「ひまら？よくわからないよ」

「ちがうー！！ひざまくらー！！」

「ひざまくらか、いいよ」

「やったーにいさまだいすきー！！」

「じゃあ、おはなしするね」

「うんー！！」

「むかし、むかし、あるところにゆうしやとまおうがいました」

「……………」

「ゆうしやは…ってまたねてる、おーい」

「ううう、ねむちやい」

「……まあ、いつものことだからいいか」

「えへへえ…にいさまだいすき」

「まったく…かぜひいちゃうぞ」

「……………」

「ねてるからわからないか」
「……………」
「さてと…ぼくもねようかな」
「……………う」
「…つかまれたらねれないよ
おはなしのつづきでもよむか」
「……………だいすき、か…いと…にいさま」

〈校長室〉

「兄さん、久しぶりですね…14年ぶりでしょうか？」
海人の妹は海人の前に立ちゆっくりと腰を掛けた。
「そうだな」
海人は一言そう答えて立ち上がり校長室の扉に手をかけた。
「まちなさいな」
校長は真剣な顔つきで海人を見つめた。
「なんだよ」
海人はもう一度通った道を戻りソファにすわった。
「あたしゃ用はないよ…ただその子が会いたいってさ」
海人は妹に言った。
「俺はお前に用はない」
「私があります。」
申し遅れました。校長私の名前は、九十九 麗華
「つかもれ
いか です。以後お見知りおきを」
麗華は言葉のあとに小さく会釈した。
「はっは、どっかのバカとは違うね」
校長は笑いながら椅子を立ち新しいお茶を自分のカップの中に入れた。
「で？なんのようだ」

海人はソファに寝ところがり麗華に顔をそむけた。

「兄さん…変わりましたね」

「……………それだけか？」

麗華は首を横に振った。

おそらく、海人には見えていないだろう。

「兄さん、私が兄さんに聞きたいのは兄さんが本気で戦っているかです」

「まだ、実践の1つもしてないのか？」

麗華は頬をふくらしながら言った。

「質問に質問で返さないでください」

麗華は海人に近くにあった座布団を投げた。

海人はそれをよけようとせずあたった。

麗華はそれを見てさらに怒った。

「昔の兄さんだったらよけたと思いますけど？」

海人はなにも言わずただただ寝ところがつている。

「…出直します、兄さん私は今の兄さんを許すことができません」

麗華は校長に一礼して校長室を後にした。

麗華がいなくなり数分たち海人はあくびをしながらソファに座りなおした。

「もう、いなくなってたか」

海人は校長室のドアに手をかけた。

その時、校長が小さく海人に言った。

「手加減を知るのは相手の力量を知っているから…覚えときな」

「さあな」

海人は校長に見向きもせず校長室をあとにした。

海人がいなくなった後校長はぼそりと言った。

「抗えぬ運命に抗おうとするのは愚かな異なり。」

また、それを知ってなお抗うことは愚の骨頂である。

…海人、お前は一体どうするんだ？」

海人は廊下をゆっくり歩きながら呟いた。

「運命は決められしことぞ

我は運命に抗うすべを持たぬなりけり」

（俺は下らないことで能力は使わねーよ）

海人が校長室を出た後数分たち梓乃が校長室のに入った。

「やつと来たのかい…おそいよ草花の調べ」

校長は新しい紅茶を入れ直しに立ちあがった。

「あかんて、うちはちゃんと名前あるねん

一屍集め ドールコレクター さん？」

梓乃は校長の隣でくすくす笑った。

校長はそれを気に留めなかった。

「相変わらずだねえ、その移動速度本当に私を超えるんじゃないかい？」

校長の言葉が終わると同時に梓乃はそれに答えるかのようにナイフを投げた。

校長は後ろも見ずに飛んできたナイフを左手で受け止め右手で紅茶を飲んだ。

梓乃はへらへらした態度から一変して真面目な顔つきで言った。

「本当に九十九 海人は異能者なのか？」

私の見たところただの無能者なだけど？」

梓乃は校長に投げたものと同じナイフをクルクル回しながらソファに腰をかけた。

「そうだね、ある意味あいつは無能者に一番近い異能者かもね」

校長はくすくす笑い梓乃は気分を害したのか机にナイフを突き立てた。

「まあ…次の模擬戦で想像以下だった場合

殺させてもらうで」

梓乃は表情を変えずに校長に言った。

校長はそれに答えず梓乃にナイフを投げた。

それを梓乃は難なく受け止め

「…ほな、さいなら」

梓乃は校長室からでた。

「これは、面白いことになりそうだね」

九十九 海人…君の選択次第だよ」

教室

「海人！！」

励は海人が教室に戻った瞬間胸倉をつかみ。

「君は入学早々2人の女性に毒牙をかけて楽しいか？！」

励は血迷った目で俺を揺さぶった。

「…すまんが説明を求める」

「なあんだあとおおお！？」

励がさらに暴走する前に浩太が静止に入った。

「ちよつと落ち着こうか…励」

浩太は何時になく落ち着いて海人を見た。

「実はな…」

回想

これは、お前が戻る数分前の話だ。

突然教室の扉が開き。

「にい…九十九 海人はこの教室ですか？」

超がつくほどの美人さんが来たんだ。

励は珍しく目を輝かせてな。

「これは、これは黒髪の美人…海人に何の用ですか？」

励はなぜかいつになく決め顔でその美人さんにアタックしてな。

「私はあなたに興味はありません。

ただ、にい…海人の教室がここならそれでいいんです」

励はそれを聞いてさらに…

「海人なんか無視して僕と今日、映画でも行きませんか？」

なんて言い出してな…

「断ります。私はあなたには微塵も髪の毛の先も捨てられた塵以上に興味ありません」

なんてずっぱり言うもんでな。

「では、失礼します」

そう言つて美女は去つて行つたんだ。

わかるか？ 励は生まれて初めて女性にアタックして初めてくれた。励は告白こそされるが全て『自分の好みじゃない』って断つてきたからな。

その美女がいなくなつた後励は…

「海人め…特待生をいいことに…あいつは…」
とか、ぼそぼそ言い始めて…

（現在 教室）

「今に至るんだが」

「なるほど」

浩太は励を羽交い絞めにして事の次第を話した。

「ちなみに聞くが…あの美女はだれだ？」

浩太は荒れている励の代わりに聞いた。

「多分だが…妹だな」

「なに？」

海人の返答と共に励が現実に戻された。

「戻ってきたか…励よ」

浩太はうんうんと頷いて喜んでいた。

「だまれえ…このロリ。ン野郎う」

励は目が血走っていた。

「俺はただ純粹に背の低い子が好きなだけだ！！！！」

そして、浩太は馬鹿だった。

二人で言い争つてるうちに海人は教室を後にした。

（どうせ明日になったら忘れてるだろう…）

海人は心の中でそう思い麗華の教室に向かった。

…が

「わかんねえ…迷った」

この学校は3種類の武所に分かれているお蔭で普通の学校より規模が大きい。

そのため、地図が配布されるのだが…

「持つてはいるが…麗華の武所が分かん」

海人はふらふら歩いていると…

「邪魔だ…」

白い甲冑をつけた騎士ともいえる3人組が海人の前に立った。

「お前のほうが邪魔だ。」

そんなコスプレしてよ甲冑して道の真ん中通りやがって」

「なんだと？貴様」

甲冑の男の一人が海人の胸倉を掴んだ。

「はなせよ」

海人は甲冑に男に胸倉を掴まれ足がほとんどついてなかった。

「黙れ…生徒会に楯突いてただでいられると思うな」

海人は男の手を叩き首を直し…

「じゃ…俺は急ぐから」

そう言って走った。

「待——」「嫌だ、無理、一拒否る きよひ」

甲冑の男が言い終わる前に否定をし海人は逃げた。

「…どうしますか？生徒会長」

生徒会長と呼ばれた男は腰につけた剣に手をかけ一言。

「捕えろ…今のやつ私の手でつぶす」

「「御意」」

二人で海人を追った。

生徒会長と言われた男は海人の逃げたほうを見た。

「何故だろうな」

彼を見たとき……私のほうが逃げたほうがいいそう思ってた
「た」

生徒会長は一度しっかり地面を蹴り言った。

「しかし、無礼者には処罰が必要だ」

そう言い生徒会長は校長室に向かった。

「さて、彼について校長に聞いてみるか」

生徒会長は独り言をつぶやき歩き出した。

〈教室〉

「すみません」

「あい？」「ん？」

教室のドアの真ん前で励と浩太が取っ組み合っていた。

「お邪魔でしたか？」

「いえ」

二人で同時に答えた。

「私、綾瀬 希海と言います」

二人はその名前を聞いて固まった。

そして

「もうすぐ学校にいてもいい時間が過ぎるから早めにいいます」

希海はふうと息をすい。

「九十九 海人はこの教室でしょうか？」

その一言で火がついたかのように…

「「まああああああああたああああ海人かああああああ！！」

！！」

二人で雄たけびを上げた。

く?????

「あゝつまんねえなあ」

一人の男路地の裏で数人の死体の上に立ち煙草に火をつけた。

「これで何人目え？」

不気味な人形を手に抱え少女は男に言った。

「あ？…そうだな？今日だけで五十だ」

「あはははッ私の勝ちだあ」

少女はくすくす一嗤 わら っていた

「チッ…お前は何人だよ」

「わたしい？…百」

少女が言つと突然数え切れないほどの死体があらわれた。

「…全く、いつになくすごいですね？—暗黒の人形 ブラック・ドール」

煙草を吸いながら嗤った。

「そうかしらあ？—死を呼ぶ二銃 デッド・トリガー」

煙草の男は嗤いながら死体から降りた。

「あはははッまだかしらあ？」

少女は人形を強く抱きしめた。

「お嬢様？準備が整いました」

執事服の男が少女の手を取った。

「遅いわよお？—霧を纏った刀 カオス・ソード」

少女は文句を言いながら車に乗った。

「俺も乗るぜ」

煙草の男はそう言つて車に乗り込んだ。

執事の人は指を鳴らした。

すると、突然死体が消えた。

「では…行きます」

そして車は走つて行つた。

「待つててねえ…—無限の魔法所持者 ノーリミット・マジシャン」

「

車は少しずつ黄葉台護衛教育学校にむかっていた。

第肆章ゝ生徒会ゝ（前書き）

今回も日が開いてしまいました。
これから頑張っていこうと思います。
あらためてよろしく願います。

第肆章　生徒会

第肆章　生徒会

「????」

「お嬢様…目的地まで約485時間と38分を切りました」
執事の正装を来た男が人形を持った少女に言った。

「…結構かかるねえ…まあ…いいけどさあ」

「お心遣いに感謝します」

執事はそう言つて車のハンドルを切り道から外れた。

「…なるほど、探しても見つからないわけだ。」

なあ？お嬢様と執事さんよ」

煙草を啜えた男は二人を見て嗤つた。

「…そうだねえ、こんなところに道があるとは思わなかったよあ。
でも…いいところに隠れたねえ…無限の魔法所持者も」

少女はくすくす笑つて言った。

「たくさんの死体…早く見たいなあ」

「まったくだ」

煙草を一気に吸いきつて…。

「あそこには一瑛瑯者　ピエロ　もいるしきをつけねえーとな」

「では、行きますね」

執事服の男はそう言つて車を道ではないところを通つて行つた。

～学園　教室～

「綾瀬嬢、海人にどのような用事があるんですか？」

励は希海に聞いた。

「海人には助けられたのでお礼をしたいだけです」

希海はそういうとピンポイントで海人の席に座つた。

「でもよ……綾瀬って言ったら……あのお嬢様だろ？」

浩太は励にだけ聞こえる声で言った。

「そうだな……正直この学園で一番の金持ちだ」

綾瀬 希海

綾瀬財閥のお嬢様。

権力も表向き上逆らえるものはいない。

この学校の創立者は綾瀬財閥に言われて作られたとも噂されるくらいだ。

「んっど？綾瀬お嬢様でいいのか？」

浩太は希海の周りをグルグル回っている。

「別に敬語じゃなくても構わないわ」

「そうか……じゃ……いてっ、何する励」

励は浩太の頭に鉛筆を突き立てた。

「お前、わかっているのか仮にも彼女は綾瀬財閥のお嬢様だ

「お前はちよつと黙っている」

い

浩太はから返事をしながら自分の席についた。

励はある意味不思議だった。

（まあ……学校が始まってまだ1日とたつてはいないが……）

この学校はお嬢様を護ることを学習する学校。

決してお嬢様から何かされることはない。

つまり、お嬢様は護られて当たり前
の存在だ。

俺ら
こっ
ちが護るのが仕事ならこっ
ちは護られるのが仕事だ。
彼女ら

助けられたのがなんなのか、励は分からないが……。

自分の思っていた当たり前が当たり前じゃなくなるのが怖かった。

「綾瀬お嬢様……今、海人は学校長のもとに出向いております。

今日は戻るかはわからないのですが……」

励は希海に説明すると希海は「待つわ」と言つて海人の机に突つ伏した。

「しかし、時間が時間です。我々はお嬢様を護るのが仕事です

こんな時間までお嬢様を待たせるわけにはいきません」

希海は「わかったわよ」と言って立ち上がった。

「ごめんさない

今日は帰ります」

そう言つて希海が扉を開けようとしたとき…。

突然、扉があいて。

「あつぶねーなあ…あいつらマジで殺す気だろ？」

海人が教室に入ってきたのと同時に希海とぶつかった。

「あつ……………」

希海がバランスを崩し倒れかけた。

海人は希海に手を伸ばし抱き寄せると同時に扉を閉めた。

「あぶねえ…大丈夫か？」

希海は顔を真つ赤にしながら答えた。

「え？……ええ、大丈夫よ」

「で…いつまで抱きしめるんだ？海人」

励は机に座りながら言った。

「え？ああ、そうだな」

海人はすまんなと言つて希海から手を放した。

希海は一瞬寂しそうな顔をしたがすぐに真面目な顔つきになって。

「あなたが海人？」

「ああ、そうだな、それと——」

海人が言いかけたところで教室のドアが開いた。

「見つけたぞ！！九十九 海人！！！！」

甲冑を身につけた男たちが教室に入ってきた。

「どこで俺の名前調べたんだよ」

「一応、お前は特待生とのことらしいからな」

甲冑をつけた男たちの真ん中の男…。

生徒会長と呼ばれた男が海人の前に立った。

「流石に、海人…君を見つけるのに苦労したよ」

生徒会長は感心したよと言って両手で驚いたポーズをとった。

「あんまり苦労したように見えないけどな」

海人は甲冑の男に囲まれながら言った。

「お前ら…いい加減にしないと…」

「怒らないでくれ…こつちも君を怒らせるために来たんじゃない」

生徒会長はそう言って手を叩いた。

（九十九 海人…さつき学校長に聞いた話だと…）

（回想）

「どういうことですか？」

生徒会長は校長に抗議した。

「九十九 海人 彼は風紀を乱すと考えられます。」

早めに対処したほうがいいと思われます」

生徒会長がそう言つと校長は。

「そうだね」近いうち彼のせいでいろいろなことが起きるかもね」

「分かっているなら何故!？」

生徒会長は気づいていた。

彼が只者ではないことを…
ただもの

「私は彼にあつた時…正直足が竦すくみました」

生徒会長はさっきの自分の状況を話始めた。

「私は2年です。正直幾多の先輩を蹴散らしてこの座に就きました」

生徒会長 一新城 朋和 しんじょう ともかず

1年の頃から天才と言われ数多あまたの大会で優勝。

上級生ですらかなわないほどの強さでつけられた名前は…。

『最強の狂犬』

入学して4か月で生徒会長に就任。

今までで一番早く生徒会長の座に就いたと言われている。

この学校では、夏の大会で生徒会長に勝てばその座が奪える。

朋和は夏の大会で前生徒会長を瞬殺。

そのため生徒会は最大の権力を誇っている。

「正直、海人には勝てる気がしません。
本当にすごい威圧でした」

朋和は悔しそうに下を向きながら震えていた。
「……そうだね。」

ここの学校の生徒じゃ束になっても殺されると思うよ。
あくまで私の見立てだがね」

校長は微笑しながら立ち上がり。

「海人が本気にならないのはある意味いいことなんだよ」
校長はどこか遠くを見ながら言った。

「……私は、彼に模擬戦をこじつけます」

朋和は震える体を止めるかのように頬を叩いた。

「……さきに言うておくよ。」

あのことは絶対に言うてはいけないよ」

「7年前の……事件のことですか？」

朋和の言葉を肯定ととったのか校長は頷いた。

「わかりました」

そう言うのと朋和は校長室をあとにした。

「……口にするんじゃないよ」

そう言いながら校長は椅子に座った。

〈教室〉

（九十九 海人……正直どれほど強いんだろうか）

「用がないなら帰れ」

海人は希海を護るかのような位置に立った。

「……私は君に挑戦を申し込もうと思うだけだ」

朋和はそう言うで一歩前にでた。

「次の模擬戦で九十九 海人。」

君が勝てば生徒会長の座を譲る」

朋和がそう言うて権利書を取り出した。

「これを君に受け渡そう」

「いらん」

その一言で周りの空気が凍った。

「てめえ…ふざけんなよ…」

海人は朋和をにらんだ。

「ぐっ…それでもだ。」

君には戦ってもらう」

朋和はもう一歩前に出た。

「それとも君はそんなに弱いのか？」

朋和がそう言っていると海人ではなく希海が反応した。

「…なめないでよね」

そう言っていると海人の前にでて。

「海人は私を助けてくれたんだから強いわよ。」

あんななんかないけど海人のほうが断然強いわよ」

希海が啖呵を切った。

海人はものすごく切れていたが正直あつけにとられていた。

「そうかい…では、そちらが負けたとき君が責任をとってくれるんだね？」

「いいわよ」

そして、海人の同意もなしにことは進んでいく。

「では、2週間後だ…2週間後の模擬戦で決着をつけよう」

「わかったわ」

「…達者で」

そう言っていると朋和と甲冑の取り巻きたちは去って行った。

海人はその様子を見ていた。

というより口をはさむ暇がなかった。

「ということでは海人頼むわよ」

そう言っていると希海も教室を後にした。

「…なんか、シニールだったな」

「ああ」

励は海人のバックを海人に渡した。

海人は「すまん」と言って受け取った。

励は自分のバックをとり行くのと同時に横で寝ていた（いつのまにか）浩太を叩き起こした。

「ぐほっ…もう終わったか？」

「ああ」

励は浩太の首のあたりを掴み引きずりながら教室のドアを開けた。

「確か…寮は一緒だったな？」

励は海人に言った。

「そうだな」

海人はバッグを肩にかけて歩き出した。

「で…どうするんだ？」

「…なにが」

「わかってるだろ？」

海人はどうしようか迷っていた。

正直学校自体もこういった不思議な学校に入ろうとは思っていないかった。

海人は昔から物事に巻き込まれるのが大嫌いだった。

そのため、自分のいくら関与していようと無視を決め込んでいた。

海人は心を閉ざした。

表向きになにかすることはなくなった。

むしろ、それせいでろうか何1つできなくなった。

料理も家事も戦闘も。

全てにおいてやる気が起きなくなっていた。

そんな時一人の女性が海人を助けた。

それが7年前の出来事だ。

「俺は戦わないよ」

海人は歩くスピードを上げた。

「……あの子はどうするんだ？」

「さあな…あいつは自分で切った啖呵だ自分でどうにかするだろう」

「…そうか」

励はそれ以上なにも言わなかった。
むしろ言えなかった。

海人が7年前に何があったかそれを知ってる励は何も言えなかった。
浩太も引きずられてるせいで最初こそ五月蠅かったがもう何もし
やべらなくなった。

真面目つきで引きずられている。

浩太も励もそれを目の当たりにしたからだ。

「…俺は、何してるんだろうな」

海人の質問に二人は答えることが出来なかった。

そのあと3人で寮に帰ったが一言も喋らなかった。

この日、3人に会話はなかった。

——7年前——

——海人は***を失った——

第伍ノ章ゝ戦いゝ（前書き）

こんにちは。

今回、第伍を書くことが出来ました。

今回から、さらにヒートアップするので楽しみに見てください！！

第伍ノ章　戦い

第伍ノ章　戦い

「7年前出来事」

海人の目の前で幼馴染が死んだ。

海人はそのころ10歳。

まだ、親元で暮らす時期。

でも、海人は親とは疎遠しそのころはその幼馴染の所で引き取られた。

引き取られたのは正確には海人が幼馴染にあつた時だ。

海人はなるべくその家族には関わらなかつた。

海人の幼馴染：名前は遠野　春香　とおの　はるか。

茶髪に右に青、左に赤という世にも珍しオッドアイの子。

海人の初めての親友でもあつた。

…でも、殺された。

7年前：その日は雪が降っていた。

遠野家は毎年この日になると決まってパーティーを開いていた。

海人はそれに参加しなかつた。

遠野家はお金持ちだったがこの日に限っては家族でパーティーをしたからだ。

そのため海人は必ず何らかの方法で風邪をひいた。

最初は冷たい水を頭からかぶって表で4時間座つてた。

次の年は熱湯をかぶった後外で気づかれるまでいた。

そして次の年も…そのまた次の年も…。

そして、今回初めて海人は風邪をひけなかつた。

海人は仕方なくそのパーティーに参加した。

規模は大きくなくこの家庭でもやりそうな内容のパーティーだったが海人には懐かしかった。

自分の父が墮落してからこんな思いはしたことがないからだ。

海人の父はその後はずっと暴力の嵐…。

それに耐えられなくなった母は妹をつれて逃げた。

でも、海人は逃げられなかった。

海人は自分の父親を見捨ててすることはできなかった。

でも、結局は見捨ててしまった。

遠野家に来てしまった。

海人は少々ながら自分のしたことに反省した。

「海人君、今日はご馳走がたくさんあるからね」

春香の父は海人に優しくいった。

それは海人にとってとてもうれしく懐かしくあった。

「あ…りがと…う」

海人はしどろもどろになりながら春香の父にお礼をした。

「ほら、たんとお上がり」

春香の母が海人にお皿を渡した。

海人はそれを照れくさそうに受け取った。

海人は嬉しかった。

こんなふう to 受け入れてもらえるのが。

今までの苦労がまるでなくなるかのようだった。

「そうそう…あの、励君と浩太君も招待してるからあと少しでくる
と思うよ」

春香の父はそう言つて海人に優しく笑った。

春香も俺に優しく笑った。

それが海人はくすぐったかった。

…でも、幸せは続かなかった。

「あははっ…こんばんわ」

窓から突然見知らぬ男の声が聞こえた。

「誰だ!!」

すぐに春香の父がそれに応戦した。

男は笑いながら。

男の格好は道化を思わせる格好をしていた。
頭には包帯をつけその上からピエロのような仮面をつけている。

「シヨーーーーータイム！！」

すると、突然春香の父はその場に座り込んだ。
「な……に……をする」

「あははははっ……ちよつと黙ってもらったのさ。」

そういうと男は目の前に一人の少女を出した。

海人の妹だ。

「…それは、俺に聞いているのか？」

瑤瑯者は楽しそうに嗤った。

海人が聞くと瑤瑤者はくすくす嗤つてから。

瑤瑯者は楽しそうだった。

海人は赤い瞳でその様子を見た。

抗いたのに抗えない…。

何故か動けない。

だけど、海人は抵抗した。
次々に倒れていく。

最初は春香の父。

次に春香の母。

そして、次に春香…。

みんな、何も言えずに死んでった。

それが、一瞬だったか…数時間だったかはわからない。

ただ、その場で全員殺された。

例外なく海人の妹まで。

いや…実際はみんな生きている。

でも、おそらく間に合わない。

手遅れ。

瑠瑠者は嗤った。

『皆殺し…海人君…君にはもう力は必要ない』

海人はそのあと意識を失った。

その後、励と浩太の話だと。

二人が入ったら突然血まみれの部屋で急いで救急車を呼んだらしい。

その時はなぜか海人の妹と春香の父と母と海人の姿しかなかったらしい。

海人の妹と春香父と母は一命を取り留めた。

海人の妹はその後すぐに迎えが来たらしい。

海人はその時病院にいたからだ。

春香の父と母はわざとだか当たり所が良かったのか大きな血管のみ切れていなかったらしい。

しかし、警察の調べによると春香は助からないらしい。

今の状況でDNAを調べた結果。

春香の血と思われるものが1？以上検出された。

それは、平均的にヤバイ状況にいるらしい。

それに、いないということはさらわれたか自分で逃げたかだ。

でも、おそらくどっちにしてももう手遅れだ。

海人はそういわれた。

春香の父と母は海人に優しく笑った。

海人は、それ以降笑えなくなった。

そして、赤い瞳はさらに紅く紅蓮の瞳と呼ばれるようになった。

〈教室〉

「…えっと、いいか？」

励は申し訳なさそうに言った。

ちなみに、今は午後7：00。

学校も終わり寮に帰つてるところだ。

「なんだ？」

海人は励を見ずに聞いた。

「…今は、あの約束をしてから何日たったかしつてる？」

ちなみに、あの約束とは前回の模擬戦のことだ。

「えっと、今日で1週間と5日かな？」

「そうだよ！！あんた、何もしてないよ？！」

励は海人に訴えた。

「俺はでない」

海人は短く答えた。

「…模擬戦はそうもいきません！！」

これは俗に言う新人戦みたいなものなの！！

だから1年はみんな強制参加」

励は声を張って海人に訴えるのには理由があつた。

それは、さかのぼること1週間前…。

〈回想〉

「…ただいま7日過ぎました」

励は海人に告げた。

海人は出ないの1点張りだった。

ちなみに、最初の3日はいろいろな準備で授業はなかったが、4日目から授業があった。

ちなみに、最初の授業は魔法の基礎。それで1日が終わった。

5日目も同じ。

そして、6日目には実践が少しありみんな魔法を使ったのだが…。

海人のみ、一切、魔法が使えなかった。

術も魔力も足りてるのになぜか発動しなかった。

そして、7日目の今日今からまた実践がある。

今日、発動できなかったら色々と困る。

昨日校長がそいつ魔法使えるよ〜みたいなこと言ってたからである。

ちなみに、本人 かいと は使えないと言っている。

励は迷っていた。

海人は出ないというのが少しは出る気にならないとあのお嬢様が大変なことになる。

この学校の目標はお嬢様を護ること。

だからこそこの学校の目標を護るために励は頑張っているのだが。

海人は全然動く気配がなかった。

この学校の女子の10分の1は全員お嬢様でそのお嬢様たちは基本的に違うところで授業を受ける。

お嬢様たちは基本的に護られる側に就くまでの間…。

優雅な時間を過ごしたり護衛者 ボディーガード の授業を見ていたりするという。

この学校では自分のことを護衛してほしい人は模擬戦のあとに申し出がくるらしい。

ちなみに夏の大会までにいないと強制的に退学になる。

励はそれだけは避けたかった。

おそらく、この試合に負けたら（なにもせず）お嬢様たちは誰一人海人を選ばないだろう。

そして、希海はこの前。

「もし、海人が負けたら退学してやるわよ!!」
と言っていた。

つまり、実質…海人は退学になってしまう。

それが励は嫌だった。

「どうにか…な？」

励がそういうと海人は…。

「わかった。少し頑張る」

…結果、一つも使えなかった。

簡単な属性のないエーテル魔法の一つすら使えないのだ。

先生たちからは使えないのではなく使わないのじゃないかというのもでてきた。

海人は、それでも焦った感じではなかった。

これが1週間前の出来事…。

〈教室〉

「…で？今に至るのだが…。明後日なんだが試合」

「俺は出ない!!」

海人はガッツポーズをした。

「頼む…でてくれよ」

「無理…俺武器ないし」

海人は適当そうな理由を言った。

「ちなみに、武器があつたらでるのか？」

励が海人に聞くと海人は。

「は？なにそれ…でるわけないじゃん」

海人は当たり前のように言った。

励が何か言おうとしたところ…。

「あの…俺そろそろ喋っていいか？」

浩太が割り込んできた。

浩太はちなみに、罰ゲームにより喋るの禁止令が発令された。

「…まあ、いいんじゃない？」

励は適当に浩太をあしらった。

「そう？じゃあ…言わせてもらっぜ」

浩太は指を立てた。

そのあと真面目そうな顔をして立ち止まって言った。

「海人…」

海人もその雰囲気を感じ取ったのか立ち止まった。

「逃げんのか？」

「何のことだ」

「わからないのか？」

浩太は後ろ向きの海人に向けて言った。

「とんだ、お笑い草だ…お前何も変わってないな」

「突然変わったらこええよ」

海人はそれでも適当そうに言った。

浩太にはそれは言い訳に聞こえた。

「ふざけんなよ？」

「は？」

初めて、この二人がぶつかった。

今まで、浩太は海人に何も言わなかった。

でも、今回は口を出した。

…7年前、海人は浩太と励に言った。

『次は…護ると』

でも、次なんてあるわけがない。

海人はそれ以降どんどん落ちぶれた。

「お前は、逃げてるだけの餓鬼だ」

「ケンカ売ってるのか？」

海人は声を荒げ浩太の首を掴んだ。

体格差にして40？以上。

それでも、浩太の体はどこか浮いてるようにも見えた。

「お前…そうやって自分だけ不幸に思ってるのかよ」

浩太は続けた。

「今のお前は7年前のことをやり直したいと思ってるんだろ？
すくなくとも7年でいいから戻りたい…戻ってやり直したいそう
思ってるはずだ。」

でもよ、じゃあ今のことはいいのか？

また、7年…いや5年かも下手したら1年かもしれない。

やり直したい…そう思わないのか？

そう思えないのか？

だったらよ…今やり直せよ…。

7年前が今戻ってきたんだよ！！」

浩太は海人の手をはたきながら言った。

海人は拳に力をいれて小さく弱く言った。

「…過ぎた時間は戻らない。」

たとえ、どんなに時を熟知しようと」

海人はそう言って歩き出した。

「…でも、意味のないことに迷う必要はない」

「俺は迷ってなんかない」

浩太の質問に海人はそう答えたが。

浩太は…。

「迷ってるよ…誰よりかお前がな」

浩太がそういうとそれに答えず海人は走り出した。

励と浩太はそれを見ていることしかできなかった。

「…あいつ、戻ってくるか？」

励は心配そうに言った。

「大丈夫…あいつは試合にでるよ。」

なんだかんだ言って約束を破ったことはないからな」

浩太と励は歩いて寮まで行った…。

次の日…。

海人は学校にこなかった。

そして、当日…。

この日は珍しく雨だった。

「海人はまだか？」

今の時間朝の12:30。

試合まであと10分だ。

この模擬戦は基本的にいつぺんに終わらせるのだが…。

この試合だけは別だった。

生徒会長と特待生の戦闘。

そして、その特待生は何もできてない。

この試合に興味を持たない者はいなかったため。

校長がすべてが終わった後にということになった。

それでも海人は来ない。

「呼んできますか？」

一人の男子が言った。

「いや…いい」

朋和は短く言った。

「時間に遅れたらそのまんま試合放棄とみなす」

そして時間は過ぎていく…。

「あと30秒…これは来ませんね」

ある先生が言った。

7人を除いて全員来ないものと思っていた。

校長…梓乃…希海…浩太…励…朋和…麗華…。

この7人だけはまだ来ると思っている。

そして、カウントダウンが始まった。

「10」

……。

「9」

……。

「8」

……。

「7」

7と同時に扉があいた。

そこには身長があまりにも低く紅蓮の瞳をした少年が立っていた。

「遅くなった…始めようや」

「来ると信じていたよ…九十九 海人」

会場が沸いた。

まるで、ライブのような盛り上がり。

「…始めるか」

朋和の声と共に外野は静かになった。

「ああ」

海人は短く答え二丁の拳銃を出した。

「それが君の武器かい？」

「そうだな…刀のついた拳銃 ガン・ブレード だ」

そして、始まる。

「手加減はできないよ…海人君」

「しなくていい」

海人は短く答えた。

朋和は笑った。

そしてそれと同時に海人が言った。

「それと…」

海人は二丁の銃のトリガーに指をかけながら。

「俺も…手加減できねーわ」

…そして、戦いは始まった。

第陸章　新しい門出

第陸章　新たな門出

模擬戦

「はっ!!」

朋和は海人に縦切りをした。

だが、海人はそれを後ろにはねてよけた。

朋和の武器は長剣だ。

剣自体が長く長さは約1m強。
重さは10?。

一応両刃ではあるが剣自体は細い。

風を切る音と共に海人は持っている刀のついた拳銃　ガン・ブレード　で撃った。

海人は、朋和とは対照的に刀のついた拳銃　ガン・ブレード　を使っている。

これは、刀もついているがそこまで長くはない。

付け根から約15?。

普段は刀は隠れている。

ちなみにもともとこれは両手武器だ。

拳銃自体は1つで10?以上する。

それを2丁となるとかなりの重さだ。

それに拳銃自体はとても長い。

長さは、約50?強。

攻撃力は高いものの重く扱いが難しいためあまり使われていない。

「やあああああああああああああああ」

朋和はそのまま縦横斜め右下から上に切り上げた。

朋和は音速とも取れるかのような速さで切った。

だが、海人はそれを全く気にとめず全部片手にある拳銃で受け止めた。

正直止められると思っていなかったのか朋和は戸惑っていた。

その隙に海人は数発撃った。

海人が撃ったのは魔弾。

魔弾は、魔法の宿った銃弾。

銃弾の代わりに自分の魔力で銃弾を創りそれを撃つ。

魔弾には普通の弾とは違いいろいろな能力をもっていたりする。

能力は人さまざまだ。

ちなみに海人のつけている能力はスピード。

ちなみに平均的なスピードに比べると2倍ほど早い。

だが、その分魔力の消費が早い。

1発で普通の中級魔法と同じ魔力を使う。

効率は悪いが一番当てやすく他の能力に左右されない点を持つ。

しかし、それでも朋和はそのスピードに追い付き剣で撃ち落とした。

「…その程度のスピードならとうに見てるよ」

朋和は剣で真空波をだした。

「そっか…そろそろだな」

海人はそういうと真空波を避けて朋和に撃ち続けた。

朋和はそれを撃ち落としながら言った。

「…魔力の無駄だよ」

朋和はそれを避けずに撃ち落とし続けた。

一方そのころ…観客席では…。

「えっと…あれ本当に九十九か？」

「ありえないな」

外野はほかにも…「ハッターか？」とか「八百長じゃ？」などと口々に言っていた。

でも、

「うるさいわね！！あんたらも悔しいんだったらあんなだけのことやってみなさいよ！！」

その外野を黙らせたのが希海だった。

希海は目をキラキラ輝かせて二人の試合を見ている。

「…ありがとうございます」

そこに麗華が来た。

「あなたは…確か…」

「私の名前は九十九 麗華です。」

海人の妹です。ついでに剣術1年です」

麗華がそう言うのと希海はそういえばあなたがと相槌を打った。

「でも、なんでお礼を？」

「…いま、兄さんのことを褒めていたじゃありませんか」

麗華は一回後ろを見てからもう一度希海を見た。

「褒めてたって言うてもそんなでもないわよ？どこに褒めた言葉がはいってたのかしら？」

希海は試合を真剣に見つめ麗華に問いかけた。

「今、さつき『あんだけのこと』って言いました」

麗華は試合を見つめながら答えた。

「勘が鋭いのね？」

「そうでしょうか？」

二人は笑いながら試合を見ていた。

二人の試合はある意味圧倒的だった。

普通に見れば互角…なのだが力があるものが見ればどう考えても試合の結果は決まっているのだ。

「海人は…あれで本気なの？」

希海は麗華に問いかけた。

「おそらく、本気はだせてないでしょうね」

それを聞いて希海は目を丸くさせた。

「それは、わざとなの？」

「いえ…これは、兄さんの精神的なものとあとは魔法による呪いなので…なんとも」

そう、海人は7年前のあの日。

琺瑯者に言われた。

『君にはもう力は必要ない』

その日から海人は魔法が使えなくなった。

魔弾や強化魔術それから物質の転送はできるのだが他の一番有名な魔法が一切使えなくなった。

「…そう、でも彼は少なくとも今出せる限りは出してるんでしょ？」

「わかりません…兄さんですから」

「ご尤も」

そう言い合って二人は笑った。

一方そのころ浩太と励は…。

「で？海人が来たがどうするんだ？」

励は試合を見つつ床に寝そべりながらうめき声をあげる浩太に声をかけた。

ちなみに、浩太が寝そべっている理由は簡単だ。

数分前こいつは集団のお嬢様の群れにこういった。

『一緒に…夢の国に行きませんか？』

浩太はあほで気づいていなかったらしくとりあえず全員に腹パンを喰らって今に至る。

「…そうだな…よ…そうと…うりだ」

途中、途中にごばっだのぐべっだのが入ったが見苦しいので励は聞き入れないことにした。

「でも…7年前のことは消えないもんな」

「…そうだな」

励は真剣に言った。

それに答えるかの様に浩太もさっきまでとは違い真剣な顔つきだった。

でも、すぐににこつと笑い。

「あゝあゝあいつは本当に強いよな」

浩太は笑いながら言った。

「だ…な」

励もそれに答えるかの様に笑って答えた。

「…試合は、もう決まるな」

浩太が唐突に言った。

そこでは、もうほとんど決着がついていた。

「さて…俺らももつと精進せねばな」

「だな」

二人は笑っていた。

その笑顔は本当に眩しかった。

…でも、周りのお嬢様たちはその光景をみて。

「BLだ」とか「同性愛だ」とか言っていたらしい…。

そして、戦闘…。

二人の戦闘は続いていた。

優勢なのは見た感じ朋和だ。

全ての弾丸をはじき壁まで海人を押し寄せていた。

「これで…勝負あつたね」

朋和は笑顔で言った。

「早く降参してくれないか？」

朋和は自分の勝ちを確信した。

本当は勝てないと思った。

でも、今は違う…。

この距離なら彼が撃つより速く剣を下ろすことができる。

その時点で自分の勝ちだと思っていた。

でも、海人は何も言わなかった。

ただ、下を向き笑っていた。

「…降参しないなら——」

朋和が言い終わる前に海人は言った。

「お前の負けだ」

その声と共に目の前で剣が砕けた。

「なっ…!!!」

朋和はあまりにも驚き言葉を失った。

その間に海人は拳銃を変形させ刃を出して二つの刃で朋和の首をとらえた。

ちなみにこれは模擬戦…。

決して殺してはいけない。

そのため基本的に今のように壁に押し寄せるか、また武器を壊すかで決着がつく。

でも、今回はおかしかった。

いきなり、朋和の武器が破損した。

それも、たった一言で…。

朋和は下唇を噛みながら言った。

「…参りました」

その言葉と共に会場は五月蠅くなった。

みんな口々に海人を見直す声やまた他に生徒会長かわいそうなどと言った声も上がった。

でも、そのなかで一人の少女が前に出て言った。

「あゝ…オホンッ…」

こんにちは、みなさん、うち笹岡 梓乃います。

今の試合見てたんやけど、質問ええか？」

海人の知らない人だった。

だが、励と浩太は知っている。

そう、彼女は笹岡 梓乃。

一応お嬢様だ。

「えゝ…今の試合見てて思ったんやけど不可解な点がいくつかあんなん」

「なんだ？」

海人はマイクをつかって喋る少女に向かって聞いた。

「まず…一番の疑問からやけど…」

なんで突然かいちよーはんの武器が破損したんや？」

梓乃の疑問と共に会場から「そういえば」とか言う声が上がった。

「説明してもろていい？」

「構わねーよ」

海人はそういうと自分の武器を上にあげて言った。

「俺の武器は見たとおりだ。」

自分の魔力におおじてその威力に変化が出る。

ちなみに、今回使った俺の弾は何かわかるか？」

海人は梓乃に聞いた。

梓乃はうーんと一度考える素振りをとってから…。

「スピードの出る魔弾ちゃうの？」

梓乃がジェスチャーをしながら答えた。

すると、海人は笑った。

「ムツ…何が可笑しいねん」

「…悪い、ただそれは大いに勘違いだ」

海人の声に周りがざわついた。

朋和も後ろでおどろいた顔をしている。

「俺が撃ったのは小さくてかたい魔弾だ。」

ここまで言ったら勘のいい奴は分かるんじゃないか？

俺は、わざとこの生徒会長に当てなかった」

海人は拳銃を上向きに一回撃った。

すると、ものすごいスピードで天井を貫通した。

でも…その穴はものすごく小さいものだった。

確かに、天井が遠いせいもあるだろうがそれでも小さく感じるものだった。

「こいつは全部剣で受け止めた。」

そのときにこれは堅くて小さい…だから剣が少しずつ削れていったんだ」

「…つまり、受け止めるのがもとから狙いだったちゅーわけやな？」

「まあ…そういうことかな。」

あとは、ご想像にお任せするぜ」

海人はそういうと自分の武器を腰に納めた。

「…じゃあ、最後に一つええか？」

「この際だ、なんだ？」

海人はその場に座り込んだ。

梓乃はふうと一回息を吐いてから…。

「なんで、体にあてなかったんや？」

その言葉に会場の全員が驚いた。

確かに言われてみればそうだ。

わざと外したということはつまり当てることもできなくなかったということになる。

海人はこの試合の中で武器にはじかれる以外で会場に弾が飛んだことはなかった。

「なんでや？」

梓乃は含みのある笑顔をしながら言った。

海人は、一度息を吐いてから言った。

「お前は模擬戦で人を殺したいのか？」

海人は言った。

「俺は人を殺すためにここに在るわけじゃねーんだ。

確かに今やつてゐることは人だけでなく生き物すべてを殺すことを学んでゐるかしんねーけどよ。

もとは護る為じゃないのか？

俺は護る為にここに在るからだよ」

海人はそう言ったあと立ち上がり。

保健室と一言いつて立ち去った。

会場はしばらくのあいだ静寂だった。

でも、その中に数人笑顔の人物がいた。

「兄さんらしいですね」

「そうね」

二人意気投合しあふ少女二名。

また、

「…吹っ切れたか」

「そうだな…俺らも少しは頑張ろうぜ」

肩を叩きあいながら友人の背中を見届ける少年が二名。それに、海人に負けて地面に座っている男もそうだ。

「…護る為、か…考えてもいなかったな」

それぞれの思いが…会場にあふれていた。

そして、試合が終わるのと同時刻。

「ああ…退屈だったあ」

人形をもった少女が校門の前に立った。

「すみません…お嬢様、一応予定時刻より早く到着したのですが」
執事服の人は申し訳なさそうに頭を下げていた。

「まあ…いいわあ、待ってなさいよ。」

九十九 海人！！」

少女は校門で静かにほほ笑んだ。

「あつと…あの、美人さん!？」

浩太は驚いて一歩前に下がった。

よく見ると麗華は自分の腕を海人の腕に絡めていた。

「ごべらっ!!」

浩太は後ろに吹っ飛んだ。

そして、海人はその音で起きた。

「ムウ、あゝ…朝か…」

海人はふうとため息をついた後自分の格好をみた。

「あれ?…俺いつ着替えた？」

海人はかなり驚いている。

が冷静を装いつつ…。

「ボクハオオキクナツタラ、ナチュ…ナ、ナチュ…」

海人は噛みまくった後ふうと息を吐き…黙った。

海人の声を聞いて近くにいた上級生たちは口々に「かわいい」と

か「超好み」などと言って立ち去って行った。

「にいさん…人気ですね」

麗華はジト目で海人を見た。

海人はそのことには冷静にかつ普通に言った。

「…大丈夫、俺は年上は好きじゃない!!」

海人は昔から何故か年上の女性に好かれることが多くあったので恐

怖の対象と化している。

「そう…ですか」

海人の熱弁に一歩引いたが麗華はそのあと海人に思いつきり抱きついて。

「私は…ダメ…ですか？」

上目使いだった。

海人は一旦深呼吸して答えようとしたとき…。

「なああああああああああああああああああ!!」

励が大きな声を上げ驚いたように言った。

そして、何かを言いつつ走り去った。

正直聞き取れる速さの物ではなかった。

「…そうだ、学校へ行こう」

海人がそういうと麗華は一度頷いて。

「そうですね」

そう答え二人で学校へ向かった。

学校へ向かう間も麗華は海人の腕を放さなかった。
ずっと、ずっと握りしめ放さないようにしていた。

それは、他人から見たらお熱いと思われるかもしれないが海人達から見たらそうは見えない。

麗華のその行動はまるで、大切なものをもう二度と放さないようにしているようにしか見えない。

海人にもそう見えた。

麗華は昔はよく海人に甘えていた。

ただでさえさみしがり屋な性格だ。

それに、あの事件があつてから麗華とはほとんどあつていない。

海人があつたのはそう…7年前くらいだ。

海人は自分の妹をほほえましそうに見た。

麗華は本当にうれしそうな笑顔を浮かべている。

そこに…。

「何故だあ…何故だあ…」

浩太が雰囲気をぶち壊しに来た。

それも、高速で…。

（人が干渉に浸っているときになんてことを…！）

海人はそう思いつつ口には出さないようにして言った。

「麗華は俺のだ…！」

妹が抜けていた。

海人自身はそれに気づいていない。

ちなみに、今は時間にして朝の7:30。

人どおりが多い。

特に最近入学した1年生は遅れないためこの時間に来ることが多い。

そのなかで大声で海人は公言したのだ。

当人の麗華は顔を真っ赤にして呆けていた。

麗華も気づいてはいた。

「妹……いや、義妹」と言われることを……。

「なんだ？どうした？浩太」

海人は麗華と腕を組んだまま浩太に近づいた。

浩太はいきなり目をうるうるさせて。

「俺は彼女なんて……いないんだあああああああああああああ
あああああああ」

物凄いスピードでいなくなった。

早いを通り越していた。

「あれを実戦でだせればな……」

海人はうんうんと頷いていた。

ちなみに、麗華はまだ呆けていた。

海人はそんな麗華の顔を覗き込むかのようにして見て言った。

「おい、どうした？」

麗華は、海人の声を聞き冷静を装いつつ言った。

「私は……だい……大ジョブですよ!!」

噛み噛みだった。がとりあえず海人は氣にもとめず笑った。

「あははっ……おもしれーや」

海人は笑った。

麗華はそれを見て一緒に笑った。

最初こそ麗華も自分を馬鹿にされていると思ったのだが海人の顔を見てそうじゃないと気づいた。

海人の顔は昔のような顔つきだった。

それは、幼くなつたとかではない。

麗華から見て一番兄が兄として輝き心が強かった時期の顔つきだ。
なにか、決意をしたようなそんな顔。

麗華はそれをみて一緒に笑った。

なぜなら、その笑顔は自分を褒めているかのようなうだつたからだ。

「えっと…いい話の所いいかしら？」

二人が笑い合っているところに希海が来た。

「ははっ…ああ…はあ…はあ…いいぜ」

海人は疲れていた。

はあはあ言いつつ息を整えてもう一度言った。

「いいぜ」

希海はそれを確認して言った。

「海人はこれから私のことを護衛してもらおうから!!」

希海は空いている海人の腕に自分の腕をからめ言った。

「わかった!？」

海人は麗華を一度見た。

麗華は笑顔でうなずいた。

海人はそれを確認してから言った。

「OK、俺のできる範囲でな」

海人の返答を聞き希海は満足したのか腕をはなし去って行った。

海人と麗華はその背中を見つめていた。

そして、時間にして30分後に海人は教室についた。

ちなみに教室で海人は麗華のことをさんざん聞かれた。

そして、HRが始まった。

HRはそこまで面白いものではない。

HRでは昨日の模擬戦をもとに自分の護衛するお嬢様を発表するものだ。

海人は机に突っ伏して受け流している。

ちなみに、励はどこからか魂が抜けたような顔をしている。

おそらく、自分の護衛したかったお嬢様ではないのだろう。

海人は、海人の護衛するお嬢様をもう告知されたのでどうでもよかった。

HRは難なく終わった。

先生の話だと教室に自分の護衛するお嬢様が来るとのことだった。

「まあ…いいか」

海人はつぶやきつつもう一度窓の外を見た。

そこには曇りない空が続いていた。

「海人」

励が来た。

いつの間にか復活していたようだ。

「なんだ？」

「聞いていなかったのか？」

励はなぜか誇らしげだった。

最近励のキャラがいろいろ崩壊してきたと海人は思ったが口には出さずに言った。

「俺は基本は刹那主義なんだ」

海人はそういうと励の肩を叩いた。

「つまりは聞いてなかったんだな」

励は笑顔でそう言った。

その笑顔はまるで、自分の親友が何一つ変わらなくそのまんまであるのを喜ぶかのようだった。

海人はその質問に答えなかった。

「新しい先生が来るんだとよー！」

海人はいきなりどうでもよくなったのかふっと息を吐いて言った。

「俺は昔から年上が嫌いなんだ」

海人はそう言っただけ前髪をかき上げた。

「そうだったな…嫌いというか苦手じゃなかったか？」

励がそういうと海人は冷や汗を流しながら…。

「ソウトモイウ」

カタカナ言葉だった。

そのあとすぐにチャイムが鳴った。

海人はそのほかの情報を聞けなかった。

（まあ…今から来るのがおそらく新しい先生だろう）

海人はそう思い適当に受け流すことを決断した。

そして、しばらくしてから教室のドアが開いた。

そしてあらわれたのは背が低い白衣をまとった少女だった。

「はあくい、席につけえ」

少女は長い髪に赤い目をしていた。

ちなみに髪の色は金である。

背丈も海人より低くおそらく130？だろう。

海人は驚きながらその先生を見ていた。

「じゃーまかしたあ」

そう言っで横にいる執事の正装をした男に主席簿を渡した。

「では、私が…」

そう言っで主席を取り始めた。

しかし、海人は驚いていた。

彼女らをみて。

海人は思い出した。

そして、これはこれから始まる大惨事のプロローグにすぎなかった

…。

第捌章　敗者の務め

第捌章　敗者の務め

生徒会室

朋和は生徒会室にいた。

新生徒会長に受け渡す準備をしていたからだ。

朋和は試合に負けたら生徒会長の権限を受け渡す…そう言った。自分でも後悔している。

それに…海人には思い出させられた。

護ること…。

自分が誰を、何を護りたいか。

回想

朋和には妹がいた。

生まれつき体が弱く起き上がることもできない妹だ。

朋和は昔その妹を嫌っていた。

自分と同じ血が流れているのになぜ彼女はあんなに体が弱いそのせいで自分の名誉が落ちる。

そういったひねくれた考えを持っていた。

でも、彼女はそれに気づいているのか定かではないが必ず朋和に言ったことがある。

『Dream no small dreams for the
y have no power to move the
arts of men.』

彼女は生まれつき体が弱くほとんど本を読むことしかなかった。

そんな彼女が朋和に言ったのは『Dream no small
dreams for they have no power

to move the hearts of men.」。

意味は『小さい夢を見るな人の心を動かせないから』といったものだ。

この言葉はもとはここじゃ知られていない国の詩人で小説家が残した言葉だ。

朋和は最初どうでもよかった。

夢なんて簡単に叶うものそう思っていた。

いや、思わずにはいられなかった。

朋和は生まれつき身体能力も高く人一倍何でもできた。

練習しなくてもルールさえわかれば何でもできたしそれに失敗することがなかった。

何をしても結果は成功なのだ。

そんな自分はいつしか上に立つべきだと思った。

そう思つて夏の大会までに強くなろうと朋和は決意した。

でも、それと同時に妹の態度が悪くなった。

医者の話では長くないそう言われた。

朋和はその時こう思った。

（やっと、邪魔ものがきえる）

でも、彼の考えはすぐに一変した。

それは彼女の荷物を整理していた時のこと…。

彼女の日記を見つけた。

朋和はその日記の中身を見た。

日記は特に変哲もなかった。

でも、週の初めだけ書いてあることや文字数が違かった。

そこに書いてあったのは朋和にあてての想い…だった。

その日に朋和がしたこと朋和が話したことそれを書き残していた。それを見ていると看護婦さんが通りかかり朋和に言った。

「彼女…お兄さんが来るとすごく笑って頑張るんですよ。

諦めていたりハビリだつて頑張って耐えるんです。

それに彼女は毎日言つんですよ…お兄ちゃんは凄いなだつて…。

自分のことのように言うんです。

本当にいい子ですよね」

昔の朋和ならどうでもいいですんだ。

でも、今の朋和にはそれは出来なかった。

初めて失敗したと気づいた。

今まで自分が妹にあたってきた態度がどれほどひどいものだったかを…。

朋和は涙が止まらなかった。

今まで失敗したことの無い朋和にはある意味一番嫌な失敗だ。

自分は何もできない。

妹すら護ることが出来ない。

いや、妹の期待に応えることができない。

それが悔しかった。

そうしたら体が勝手に動いた。

彼女を護るために治癒のことについて学んだ。

妹は日に日に体調が悪くなっていく。

朋和は籠った。

治癒の魔法を何でもいから使えるようになりたかった。

1週間くらいだろうか…。

その日の夕方に朋和に連絡が来た。

『今夜が峠だ』

それを聞いて朋和はいてもたってもいられなかった。

走った。

病院まで、電車も使わず、車も使わず、走りながら何度も言った。

「妹を助けて」と叫ぶように言い続けた。

そして、病院についた。

あたりは真っ暗だ。

嫌な予感がした。

朋和は疲れている体を無理やり押し込め走った。

体の節々が激痛を訴える。

でも、あきらめきれなかった。

やっと、やっと気づいたのに護るものがなにか気づいたのに失うわけにはいかなかった。

病室についた。

そこにはたくさんの人がいた。

朋和はその人たちを無視して魔法を使った。

何度も、何度も、何度も、何度も。

諦めず治癒の魔法を使い続けた。

けれど彼女に異変はなかった。

苦しそうにして、本当に後がない…そう思った。

朋和はこれが最期なのは嫌だった。

何度も使った。

あきらめないで…何度も…。

朋和が気づくとベットの上だった。

朋和は走った。

妹の病室に…。

すると、そこには泣いている母と父が見えた。

朋和は何もできなかった自分を悔もうとしたとき…上から声が聞こえた。

「お兄ちゃん？どうしたの？」

朋和は嬉しくて…嬉しくて涙が止まらなかった。

声が裏返って久しぶりに泣いた。

朋和は気づくと妹と話していた。

今までのことこれからのこと。

朋和は初めて護りたいものができた。

それが嬉しかった。

なにか暖かった。

ココロがあつたかくなった気がした。

それ以来朋和は毎日通うようになった。

生徒会長の特権を利用して…。

（廊下）

朋和は海人の教室の前で覚悟をした。

もう、自分は会長じゃない。

一般生徒だと。

でも、それは二度と妹に会えないことを意味する。

妹に会うには時間が必要だ。

そのためには時間を作ることが必要なのだが一般生徒は規則で学校外に出ることを基本的に許可されない。

外に出るためには許可を取らなければいけないのだがとるためには実績も必要だし時間もかかる。

それに、多くて外出時間は3時間ほどしか取れない。

なぜなら護衛対象者がいるからだ。

一般生徒には必ずいないといけない。

ちなみに、会長はなくてもよいことになっている。

そのため外出時間は指定はされない。

しかし、一般生徒では必ず3時間程度だ。

朋和の妹のいる病院は往復でどんなに早くても3時間半はかかる。

そのため、絶対に許可されない。

それに、朋和の妹は朋和の魔力で命を取り留めている。

つまり、一定期間魔力の補給がなければ死んでしまう。

かわりはいない。

この魔法はかなりの高等な技術が必要とされる。

これ以上の…妹をなおす魔法もあるがそれは使える人はいないと聞く。

正直打つ手なし。

今頃海人に頼んだところでいいと言われるとは思わない。

それに、約束は絶対だ。

本当に自分をくやんだ。

でも…なぜか涙は出なかった。

ドアを開けた。

まだ、教室では授業の真っ最中…。

この教室には新しい先生が着任したと聞く。

今見たところその先生はいないみたいだが教室にはもう何人かはお嬢様がいる。

普通に考えて夏の新人戦が終わってからお嬢様たちは決めるのだがたまに模擬戦でも決める人もいる。

この教室にも比較的によくお嬢様がいるみたいだ。

そのなかで朋和は言った。

「私は、これより生徒会長の座を九十九 海人に受け渡す」

教室は静かだった。

何人が驚いた顔をしたがみんなそれぞれ思うことがあるのだろう。いや、海人の強さをみたら普通にそう思うはずだ。

「海人君、立ってくれないか？」

朋和は自分の生徒会長の証をだした。

それと同時に海人は席をたった。

海人は無言でこちらをみていた。

「いいか？この証は大切なものだ絶対に無くさないように。

それと、この書類は私が君に生徒会長の座を受け渡すという証だ。

これは再発行できないから絶対に汚すなよ。

まあ…校長先生のほうに報告してあるから大丈夫だと思うが…」

朋和はすべてを説明し終わった後すべてを渡した。

そして、ドアに手をかけた。

「では」

そう言っただけで朋和は教室を出ようとしたとき海人が呼び止めた。

「さて」

その行動に朋和だけではない教室のみんなが驚いていた。

もちろん、それは希海たちも一緒だ。

「てめえーこんなの押し付けんなよ」

海人はそう言っただけで証を投げ返し書類をびりびりに破いた。

そして言った。

「お前には護るものがあるんじゃないのか？」

そう言っただけで朋和の肩に手を置いて言った。

「お前には何かやらないといけないことがある。

俺と一緒にだ。俺はこの地位でもできる。

お前にはできないことだろ？」

お前にできることを頑張れよ」

海人のその言葉に驚いた朋和は言った。

「なぜ？それを？」

朋和の質問に後ろでニコニコしているやつがいた。

そいつは模擬戦の終わった後海人に質問した人。

つまり、梓乃だった。

「俺のダチに情報系に強い奴がいてな。

そいつが全て俺にだけ話した。

…だから何か手伝えることがあったら言えよ？」

朋和は泣いていた。

はじめて人に頼ることができた。

そして何より今まで自分と同じ立場で見ってくれる人がいなかった。

嬉しかった。

でも、約束は約束だ。

それにこんなにいる奴が生徒会長になったらここはもっといいところになる。

朋和はなんとなくそう思った。

「でもな…約束は護らないといけないからな」

朋和がそういうと海人は笑った。

そして、言った。

「お前が俺と約束したのはお前が負けたら俺らもその妹に会わせるだろ？」

朋和は言葉を失った。

妹は友達をほしがっていた。

海人の言っていることは俺らが友達になるということだ。
嬉しすぎて朋和は涙が止まらなかった。

そして、そのあと朋和は言った。

「ありがとう…親友」

そして右手を出した。

「おう!!」

海人はそれに合わせ手をだし手の甲と手の甲を合わせた。

そして、この日同時にある計画が遂行されようとしていた…。

第玖ノ章　　始終

第玖ノ章　　始終

「……………」

「どうだ？」

学校の教師のような恰好をした男は？　　ずくめの男に聞いた。
男は言った。

「準備は出来ているあとは……………」

そう言つて男は何かを渡した。

「そうか……………あと一つ聞きたいんだが……………」

教師のような男は息を吸つてから言つた。

「ここにあの３人がいるのは本当か？」

「ずくめの男はくすくす嗤つて言つた。

「問題ない……………彼らは、まだことを起こせない」

教師のような男はそれを聞いて安心したのか去つて行つた。

去つて行つたあと？　　ずくめの男はつぶやいた。

「この程度のハプニングどうにか対処してくれよ。

無限の魔法所持者……………九十九　海人君」

「ずくめの男は嗤つた。

そして、

「ずくめの男は音もなく消えた。

「数時間前」

これは、朋和が来る少し前の話だ。

つまり、新しい先生のこと。

全ての学科に１人ずつ新しい先生が加わつた。

まず、剣には執事のような服を着た青年、名前は霧崎　刀　きりさ
ぎ　かたな　。

そして、武道家には煙草を毎回吸っている渋い感じの男……名前は死銃 しじゅう。

最期に魔道士には、金髪の不気味な人形を持った少女だ、名前はドール。

それぞれで1名だけ性と名がある。

あとの二人に関しては名前しか言われていない。

そして、海人たちの所に来たのはドール。

ドールは毎回ニコニコしている。

普通に見れば笑っているように見えて微笑ましい。

そう……普通にみれば……。

〈現在 教室〉

「……で、授業が終わったんだが――」

励は海人の席に行き言った。

「なんで護衛対象者が梓乃なんだ？」

励は梓乃を指さした。

梓乃は笑いながら海人に手を振った。

海人はそれを無視して励に言った。

「超、ド、ン、マ、イ」

励 はげ まずようなかつ馬鹿にしたような言い方だった。

「……………」

励は極めて普通にかついつもより笑顔だった。

それは、すべてを悟ったようなそんな笑顔に近かった。

そして、励が席に戻ろうとしたら……。

浩太がいきなり吹っ飛んできた。

そして、海人と励は浩太を見た。

浩太には特に外傷はない。

とりわけ目立つのはとりあえず下半身と上半身の曲がり方が異様なことだ。

「……死んだのか？」

海人は席を立ち浩太の頬を引っ張った。

浩太の反応はゼロ。

ちなみに、ほかに殴る、蹴る、叩く、抓る、を試したが1つも反応しなかった。

そして、しばらくすると海人と励の後ろから声が聞こえた。

「授業中にねないで……」

それは静かでおとなしそうな声だった。

海人と励はほぼ同時に振り向いた。

そこにいたのは浩太の護衛対象者だった。

みると片手に何か持っている。

ちなみに、この人の名前は朝露 霞 あさつゆ かすみ。

髪は少し青く目は右に緑左に青。

オッドアイの珍しい目の持ち主。

また、霞は性格は浩太とは違いおとなしく落ち着きがある。

言わばTHEお嬢様である。

ちなみに、梓乃をお嬢様と見た場合。

霞は皇帝陛下に値する。

それほどの差がある人物だ。

ちなみに、その人物に海人と励は睨まれている。

しばしの沈黙が教室を包む。

そして、その沈黙を破ったのは霞だった。

「……二人はその変態の友達？」

透き通ったようなきれいな声に驚いて二人は言葉を失った。

すると、後ろにいたはずの浩太が。

「いきなり吹き飛ばすとはいいい度胸じゃないか」

なぜか、激怒していた。

寝起きに吹き飛ばされたら怒るのは無理ないが……。

「……寝たのが、わるい」

そう言っただけに着いた。

浩太はそれに抗議をしていたがやがて自分の席で寝始めた。

海人と励は二人で顔を見合わせた。

そして、二人で言った。

「あいつは、馬鹿だ!!」

そうこうしているとチャイムが鳴った。

先生はドール…。

正直数名は期待した目で見てまた、数名は厭いやな目で見た。

そして、授業は始まった。

ドールは魔法の歴史について教えていた。

至って授業は普通だった。

そして、授業は終わった。

普通の授業だったしわかりやすいいい先生でもあった。

そして、その日事件は起きた。

学校の所々で爆発が起きた。

生徒たちはすぐに集会所に集められた。

そこでは、こういった説明がされた。

今の所しられているなかで何者かが爆発物を仕掛けたとされている。

ということそれと、そのものと思われる者から電話で一報があった

らしい。

電話の内容は以下の内容だ。

諸君、私の名前はクルセイダー。

正義の味方だ。

私はこの学校が憎い。

そして、この学校は私は平和のためには無駄だと思う。

早々に廃校にしなければ神の鉄槌が下るだろう。

私の要求は早々に学校をなくすこと。

無駄なあがきはするな。

1時間後に、学校西部を破壊する。

以上だ。

この内容を聞き先生方はすぐに集会所に生徒を集めた。

この学校始まって以来のテロ行為だ。

そしてこれは海人と浩太と励にとって最悪の事件になるのだった。

第拾章　始終　ハジマリ

第拾章　始終　ハジマリ

「始まったのかい？」

校長は近くにいた教師に聞いた。

その教師は電話を受けた教師だ。

「多分……今の音からすると西部のほうが……」

1時間たったかくらに大きな音がした。

おそらく、西部のほうだろう。

また、この学校自体みんな特殊な能力を持っているためおとなしくしない生徒もいる。

そう言った生徒を朋和は止めていた。

また、励と浩太それから海人は集会所の中心でただ立っていた。

3人は言葉にはなにもあらわさずただ立っていた。

そして、梓乃と霞は何もせず2人でただ座っていた。

そして…

おそらく、2時間くらいだろうか。

犯人のクルセイダーと名乗ったものはからはまだ連絡の1つもなし。

「まったく!!」

もうそろそろ行かせてもらうぜ!!」

生徒たちも限界だった。

あたりまえでもある。

この学校自体特殊で能力者を集めた学校だ。

そのため1人1人に力がある。

生徒たちから見たら教師の言っていることは簡単に言えば『お前らには何もできない』と言っているようなものだった。

教師たちも何もせず生徒たちも現場待機。

この状況はいいものとは言えなかった。

また、数名残っている生徒がいる可能性もあるらしい。

そのせいもあり現場は思いつきり緊迫とした状態だった。

この学校は、東部、西部、南部、北部、中部、と分かれている。

ちなみに、集会所は中部に位置する。

また、新人戦なども、この中部で行われる。

この学校は規模が大きいしかも異能や身体能力の高い人ばかりが集まる学校だ。

それを考えるとこの学校にテロ行為をすることが無謀と断言していい。しかし、今回は普通にそれをやつてのけた。

驚くと同時に焦っていた。

つまり、敵も何かしらの？切り札？があるのだろつ。

現場の状況は最悪だ。

魔法騎士団……簡単に言えば今の警察のような人たちだが……。
魔法騎士団に連絡しても手を打てないのは同じだろう。

「校長、そろそろ限界です」

生徒たちを止めていた教師が校長のもとに駆け寄りそして伝えた。

校長はそれを聞き顎に手をあて考え込んだ。

するといきなり放送がはいった。

『私の名前は？クルセイダー？』

その一言によりざわついていた校内が静かになった。

相手は変声機も使わず普通に言つた。

『私はこの腐つた世界を……いや、悪を滅ぼすものだ』

その声を聞いて校長が言つた。

「歳は……30代といったところか」

校長の声は静かな集会所に響いた。

すると、クルセイダーはいきなり笑い出した。

『あはははははははははは』

そのいきなりの高笑いに怒りを覚えない者はいなかった。

この学校の女子は基本？お嬢様？だ。

つまり、プライドが高い正直そのプライドが高い人たちが黙っているはずがない。

現に数人苛立っているようにみてとれる。

『いや、失礼した。』

君たちは愉快だな……殺すのが惜しい。

そうだな、じゃあチャンスをやろう』

まるで道化のように言った。

『チャンスは一回、選択ゲームだ。』

確率は2分の1』

クルセイダーは続けた。

まるで、ここの生徒たちをあざ笑うかのように……。

『そうだな……解答権はここの生徒会長、と言いたかったのだが。』

残念だよ……確か負けてしまったらしいね。

そうなると自動的にその生徒会長を負かした九十九 海人君に解

答権が渡るね』

海人に視線が集まった。

海人は落ち着いていた。

海人には関係がなかったからだ。

そう、テロは関係がなかった。

だからこそきちんとした選択ができるともいえる。

『では、30分後にそっちに行くよ。』

楽しみにしていてね。

それと、死なないように』

放送が切れる音と共に変な音がした。

全員がその音の出たほうをみた。

その音は生徒たちの出入りするドアからしたものだ。

音は至って小さい。

だが、少しずつこっちに近づいている。

「海人君……!」

朋和は海人に近づいた。

「なんだ？」

海人は朋和のほうをみた。

朋和は一拍おいてから言った。

「麗華君と希海君の姿が見えないんだ。

海人君は知らないかい？」

「な……んだ、と」

海人は驚きを隠せなかった。

その様子を見て朋和は「知らないか」と言った。

朋和はその後海人に一言すまないと言った。

「どういうことだ？」

海人が朋和に聞いたところ朋和は二人が放送室に入るのを見たらしい。

海人はそれを聞いて出入り口に向かった。

集会所の出入り口は1つしかない。

そう、変な音がするほうだ。

おそらくクルセイダーと名乗ったものが何かをしたのだろう。

海人は人をかき分けドアの前に立った。

ドアの所には教師が立っていた。

海人は自分の武器をだした。

魔法科の生徒は基本的に自分の武器を具現化させる。

具現化というのは簡単に言えば召喚だ。

空間を歪ませその歪みに武器をしまう。

それが魔法科の一番の特徴だろう。

剣術科は武器を必ず持ち歩いている。

剣士、魔道士、武道家は基本的にそれぞれにものすごい特徴がある。

ちなみに、剣術科というのは剣士のことだ。

魔法科は魔道士。

武術科は武道家。

剣術科は必ず刀を持っている。

武術科は必ずナックルをつけている。

魔法科は何もない。

この3つの科はそう言った特徴がある。

魔法科は見た目は何も持っていない。

それが特徴だ。

ちなみに、魔法科は空間を歪ませられるがそれは広範囲ではない。

範囲は多くて自分の周りかその程度だろう。

広範囲に対して空間をゆがめるといふのはあり得ない行為だ。

海人は自分の武器　ガン・ブレード　を構えた。

「どけよ……ヘタレ共」

そう言うとき海人は容赦なくドアを撃った。

速度的には早く攻撃力は少ないが逆に今回は連射できていた。

教師たちはそれに反応し後ろに下がった。

「九十九、貴様は何をする！！」

教師の一言で海人は撃つのを止めた。

そして、その教師に銃口をむけた。

「文句を言うなら俺を殺してみろよ」

海人の声と共にドアは向こう側に倒れた。

すると、何かがいた。

それはおぞましかった。

顔は3つありライオン、サメ、ワニの3つの顔に対し体はサイのような体。

尻尾は無数にありみただけでも、ネコ、イヌ、キリン、リス――。

「実験型合成魔獣　キメラ　」

誰かがそう言った。

確かに見た目こそ悪いが実験型合成魔獣　キメラ　はまだ成功例が少なくこれからの科学に役立つらしい。

そのため注目されていたが。

「こんなところでみることになるとはな」

海人はそういつと実験型合成魔獣　キメラ　に数発撃った。

しかし、そいつには全く通用しない。

体に全く当たらない。

「アガッ……ウガアアアアアアアアアアアアアア」

実験型合成魔獣 キメラ は世にも奇妙な声を上げた。

そして、実験型合成魔獣 キメラ は唾液らしきものを海人に向かって吐いた。

海人はそれを避けたがその避けた先にもピンポイントで吐いた。海人はその唾液を当たらない位置までバックステップで避けた。ちなみに、その唾液のあたった床はきれいに溶けていた。

海人はその実験型合成魔獣 キメラ と向き合った。

「殺し合いといこうか」

そう言つて海人と実験型合成魔獣 キメラ の戦いは始まった。

誰も手出しできなかった。

海人は並みはずれた身体能力で避けているが普通では避けれるスピードではない。

体自体がでかく3m位に及ぶ体を音速で動かしている。

しかし、海人には全く当たっていなかった。

実験型合成魔獣 キメラ が攻撃したところにすでに海人はいない。

海人は励に言った。

「お前、大火力の魔法使えたよな？」

励は「ああ」と言った。

海人はそれを聞いて言った。

「頼む、俺が時間を稼ぐから演唱してくれねーか？」

励はうなずき演唱を始めた。

そして、浩太は何も言わず弱いながらも大火力ではないが魔法を演唱していた。

戦いは始まった。

そう、

ついに

壊れた歯車が

動き出した。

第拾巻ノ章ノ始終 ツグナイ

第拾巻ノ章ノ始終 ツグナイ

海人は尋常じゃない身体能力を持っている。

身体能力だけではない。

実験型合成魔獣 キメラ の攻撃は人間が反応できるより早く行動している。

それにはいくつかの理由がある。

実験段階ではあるが合成魔獣というのはいくつかの生命体を何らかの方法で合わせるからだ。

つまり、うまく合わせることが出来ればどの動物よりも特化させることができる。

例えばチーターのような強靱な速さに持久力のある草食動物を合わせることで普通より長い時間走れる。

つまり、弱点を補い合えるのだ。

基本的に今の段階で成功したと聞くのは3体までの合成だと聞いている。

実際の所3体以上となるといろいろと問題が起こる。

ただでさえ不安定な動物に更に不安定要素を加えるとなるとかなりの技術が必要となる。

それにもとは動物だ拒絶反応が起きるときもある。

そのときは酷いことになる。

基本的にその所為で研究する人はいなくなった……世間ではそう騒いでいた。

いつの間にかこの合成魔獣の実験は禁止されるようになった。

成功例はいくつかあるが寿命がものすごく短い。

普通のネコが10年だとしたら合成魔獣は1年だ。

ちなみに、今回海人たちの前に現れたのは10体以上もの動物が合

自分に何かが出来るとは思っていない。

むしろ自分が加わることで戦場が悪化すると考えたのだろう。
ところどころでその戦いを見ていた。

しばらく爆煙がたちこめた。

そして、爆煙はすぐに立ち退いた。

そこには爆発で無残な姿になった実験型合成魔獣 キメラ がいた。

「終わったか」

海人はそういうと武器 ガン・ブレード を腰に納めた。

海人の背は低いためぎりぎり床につかない程度だった。

励は深呼吸をしてから言った。

「終わった、けど……もう、低級魔法しか使えないよ」

励は杖を掲げながら言った。

それを聞いて海人は「問題ない」と答えた。

「……そういえば浩太はどうした？」

浩太は数メートル先に吹き飛ばされていた。

浩太はそこで気を失っていた。

励はため息をついて集会所の劇場の裏に浩太を運び始めた。

海人は内心気づいていた。

おそらく、励は浩太に助けられたと。

浩太は魔法の発動に合わせてバリアを張った。

それは、『光を喰らう漆黒の光線』の反動を和らげるものだ。

この魔法は威力こそ高いが反動が大きい。

死ぬ人がいるというのはそういうことだ。

ちなみに、劇場というのは集会所の設備だ。

この集会所は2階に分かれている。

2階には試合を見るための席がある。

基本的にここで試合をするので客席がついている。

そして、集会所には劇場がある。

簡単に説明すれば小学校や中学校の体育館を想像すればいい。
いつも校長先生が喋るときに上がる演台に近い。

ちなみにそこでは夏に劇が開催されるらしくそのため劇場と呼ばれているそうだ。

基本的な集会所の風景はこんな感じだ。
集会所というより体育館に似ている。

「海人君！！」

海人に朋和が駆け寄ってきた。

朋和は抜刀していた。

「すまない……援護に回ることもできなかった」

朋和はすまなさそうに頭を下げた。

「いって。」

それより麗華と希海を知らないか？」

海人は内心焦っていた。

自分の護衛対象者と妹の姿が見えなかったからだ。

海人は先の試合で敵と対峙しつつ周りに目を配っていた。

でも、海人がいくら探しても二人の姿は見えなかった。

「すまない。」

そっちのほうもまだわからないんだ」

朋和はまたもすまなさそうにしている。

「そうか」

海人は短く答えた。

そして、二人で探しに行こうとしたときだった。

いきなり放送が入った。

『生徒諸君。

30分たった。

おめでとう。

生きているようだね。

驚いたよ。

でも、本当の地獄はこれからだ』

その瞬間空気が変わった。

一瞬凍るような風と共に劇場の上に人影が見えた。

「あ……ぐっ、が」

突然、海人の隣にいた朋和が苦しみだし膝をついた。他の生徒たちもそうだ。

お嬢様を除きみんな膝をついた。

海人はその中で唯一膝をつかずに劇場の上を血のような紅き瞳で睨んでいた。

そこには、麗華と希海の姿があった。

しかし、それだけではない。

『会場みなさんお気に召したでしょうか？』

私の結界結構強力なんですよ』

そう言っただけなのはこの学校の教師だった。

しかし、この教師はあまり授業を受け持たずただ補助としていた教師だ。

『さぞかし苦しいでしょう。』

これは、魔力を持った人間や戦闘能力の非常に高い人間の動きを封じるものだからね』

そう言っただけで海人を指さした。

海人はその指を睨むようにみた。

『海人君。』

君にはツグナイの時間をやろう。

さあ……2人のどちらかを選べ。

選ばれなかった1人とこの生徒を全員殺してあげるよ。

私はクルセイダーなのだから』

海人は昔にそんな言葉を聞いたことがあった。

腹ただしかった。

クルセイダーと名乗った男は2人を前に出した。

『変な気は起こさないほうがいいよ？』

状況によつては2人の命がないからね』

そう言っただけでクルセイダーは刀を取り出した。

それは鈍く光っていた。

「そうかい」

海人はそう言った。

海人は思っていた。

（いつの日か俺がもう一度あの時に戻れたらきつと未来をかえる）

「それが、今なのかもな」

そう言っただけに納刀していた武器　ガン・ブレード　をだした。

『抵抗するなら2人の命はない。

わかっているのか？』

「ああ」

海人はそう言っただけ銃を構えた。

狙いを定めた。

なるべく、外さないように。

『いい加減にしないと殺しちゃうよ？』

男は少し焦ったように言った。

それを海人は気にせずに言った。

「さあ……懺悔とツグナイ時間だ」

そう言っただけ海人は撃った。

第壱拾弐章　始終　トモダチ

第壱拾弐章　始終　トモダチ

「????」

「で？」

あいつはどうしているんだ？」

死銃は自分の銃を手入れしながら言った。

「そうだねえ。」

「1つだけ言えるのわあ……そろそろ決着がつくということだけ」

ドールはくすくす嗤っていた。

そして、不気味な人形を撫でた。

「ですが、お嬢様もしも無限の魔力所持者が死んでしまうようなことがあったら……」

執事服を着た容姿は青年霧崎　刀は心配そうな顔をした。

ドールはそれを見て嗤いながら言った。

「あはははっ、大丈夫よお。」

彼は負けることはないわよお。

私にコロサレルんだから」

そう言って今度は人形を振り回した。

人形は時々表情が変わったかのように見えるときがある。

ちなみに今は憂いの目をしている。

その様子を見て刀は安心したような顔をした。

「分かりました。」

では、私は何もしないでいいんですね？」

ドールは頷いた。

それを見て刀はそのまま立ち去った。

そして、死銃は自分の銃の手入れを終わらせドールに言った。

「俺は敵とみなしたらお前も狩るからな」

「じよおーとおー」

ドールは笑顔で答えた。
そしてドールは嗤った。

一方そのころ海人は……………。

「懺悔とツグナイの時間だ」

海人は口ではこう言っていたが内心最悪だった。

この状況は7年前の事件によく似ている。

それに、麗華もいる。

あの時麗華もいた。

7年前に状況が似すぎていた。

それは海人だけでなく浩太や励にも最悪な事件だ。

励と浩太は今こそいないが現れたらおそらくあいつに飛び掛かるだろう。

海人もそうだった。

内心あいつに飛び掛かりたかった。

でも、耐えた。

それでは昔よりひどいことになる。

7年前の事件のあと生き残ったのは海人、麗華、浩太、励の4人だ。
海人の幼馴染の両親は最初こそ一命を取り留めたが死んでしまった。
海人にとっては7年前の事件は人生の中で最大の失敗だと思っていた。

だからこそその事件を終わらせたかった。

昔とは違うやり方で。

だから、海人は決断した。

海人は撃った。

銃弾はまっすぐ2人を打ち抜いた。

2人は前に倒れかけた。

それと同時に励が劇場の後ろから出てきた。

そして、ファイアーボールをクルセイダーと名乗った男に放った。
『な???!!!!』

男は驚いて避けることはおろか抵抗することもできなかった。
そして数秒遅れて浩太が現れた。

「2人を護れ……エーテルバリアアアア」

浩太は2人が倒れないようにバリアを貼った。

おかげで2人はバランスを崩したが撃たれた以外の傷はなかった。
その行動はクルセイダーだけじゃなく周りの人間も驚愕した。

海人はクルセイダーではなく2人を撃った。

2人はまだ撃たれたところを抑えているし血だつて出た。

海人はゆっくりクルセイダーに近づいた。

クルセイダーは焦っていた。

『何故だあ……あの2人は貴様の知り合いのはずだ。』

おかしい、おかしい、おかしいおかしいおかしい!!』

「おかしいのはお前の頭だ」

海人はクルセイダーの真ん前に立って言った。

「お前が7年前の様にしたいんならもつと別の方法をとるんだったな。」

今の俺にはそれは意味ないぜ?」

海人はクルセイダーに銃を向けた。

『こんなはず、では、ない……のに!!!!!!』

さっきまでの態度とはうってちがいが完全に平常心ではなかった。

もはやなんといってるか聞き取るのが難しくなってきた。

『キサマラ、イキテカエレトオモウナヨ』

クルセイダーはまるでいかれた人形の様だった。

そして、それを見た校長はすかさず魔法でクルセイダーを捕縛した。

「流石にお縄についてもらうよ」

そう言つて校長はクルセイダーを連れて行った。

その様子をそこにいた全員が見ていた。

また、海人のやったことも見ていた。

海人はゆっくり2人に近づいた。

2人は下を向いていた。

海人は話しかけた。

「終わってたぜ。」

とりあえず、終演つてところかな？」

海人は自分の武器を腰にしまいそして手を広げていた。

海人はなるべく空気をよくしたかった。

しかし、2人は下を向いていた。

海人は小さくため息をついて覚悟した。

仮にも女子のしかも身内の足を打ち抜いたのだ。

これがどういう意味か海人もわからないわけではなかった。

海人は目をつぶって言った。

「すまん」

すると、2人は立ち上がった。

海人は覚悟をした。

しかし、帰ってきた言葉はものすごく優しいものだった。

「何、謝ってるんですか？」

兄さんは私たちを『護った』でしょう？」

麗華は笑っているがそう言った。

そして、希海はこういった。

「『護る』って言うって何もできない奴よりかは数倍マシよ？」

それに、私たちの命は支障なし……だもんね」

2人はそう言うのと海人にまっすぐな視線を向けた。

海人は数歩後ろに下がった。

「でもよ、俺は護らなくてはいけない人を傷つけた」

海人がそう言うのと麗華と希海は笑った。

それは嫌な笑いとかではなく何か面白いものを見た幼児のように無

邪気なものだった。

そして2人は同時に同じ言葉を言った。

「私は大丈夫。」

だつて、海人^{兄さん}が護ってくれたから……私たちはちつとも

……。

傷ついてなんかいないよ?」

その言葉は、海人に深く強く響いた。

それはあの時の様だった。

初めて親友にあつた時のあの感覚に。

『おひめさまをまもるて』と言われたあの日のように。

海人は自然と泣いていた。

頬を水が伝った。

だが、それについて言うやつは誰もいなかった。

そして、この空気を浩太が壊した。

「さあゝて、打ち上げますか!」

それはある意味浩太の考えの良さかもしれない。

普段は空気が読めない浩太だが根っこの部分ではすげえいい奴なのだ。

海人と励はそう思っている。

そして、海人は静かに言った。

「俺の周りにはなんでこう……いいトモダチが多いのか不思議だぜ」
その言葉を聞いて励、浩太、希海、麗華は微笑みそしてこういった。

「……だつてさ」

「海人だから」「海人だぜ」「海人だからね」「兄さんだからです」

答えにはなっていないかった。

でも、海人は嬉しかった。

そして、海人は笑った。

それは最高の笑顔だった。

【全ての終わりが今でありそして今からが始まりだ。

時は満ちた……今からが最高の劇だ】

瑠瑠者は静かにそしてどこか面白そうに言った。

そしてその瑠瑠者の横には1人の女の子がいた。

その子は顔は仮面でおおわれている。

髪は長く茶髪だ。

そして、瑠瑠者は言った。

「さあ、行こうか***ちゃん」

それは、海人たちにとってまたも地獄に等しいことだった。

第卅拾参ノ章　過去の清算

第卅拾参ノ章　過去の清算

「????」

「全てをリセットし始めからにする。

そして、もう一度リターンする。

なんて望ましいんだろうか。

そして、そのおかげで何人の方が救われるんだろうか。

なんと平等だろう。

私はそのために過去を清算する」

琺瑯^{ビエロ}者は笑顔でそれでいて不思議な顔をした。

「……どうするんですか？」

このままだと九十九　海人が力をつけますよ？」

顔を仮面で隠した女の子は琺瑯者に言った。

琺瑯者は嗤った。

笑顔だった。

顔こそ包帯でまかれていて区別はつかないが嗤っていたに違いない。

少なくとも女の子にはそう見えた。

琺瑯者はそのあと一度頷き言った。

「私はそれでもいいのだよ。

私は彼に人類の最期の希望を託してるだけだ。

彼の所為で今が終わるか始まるかなんだ。

まあ……時はまだ満ちていない。

近いうちに殺しに行くよ」

2人の姿はもうなかった。

ほんの一瞬だった。

そして、その頃海人たちは。

「なあ…怠いんだが」

海人は引つ張られていた。

麗華と希海にだ。

麗華と希海は海人によってけがをした。

怪我はそこまで重くはなかった。

しかし、足の神経を思いつきり焼切っていた。

普通は歩けなくなるレベルだが海人は海人で仕掛けをしていた。

海人は2つの種類を付けられる。

1つ目はもちろん貫通を付けた。

2つ目は治癒を付けたのだ。

それも極限まで遅く回復する治癒を。

そのおかげで撃ったときにばれずそのまんま二人はバランスを崩した。

犯人のクルセイダーから見たら海人は2人を撃たないと思っていた。

だが、撃った。

そこに動揺が生まれた。

そしていきなり励が出てきた。

さらに人質の2人はバランスを崩している。

その状態はある意味一撃必殺。

悪く言えば無茶。

だが、その賭けに勝った。

「兄さんのお蔭でもありましたがそのおかげで死にそうなくらい痛かったです」

麗華は海人の耳を引つ張りながら言った。

「そうね、私も少し許せないところがあるわ」

希海は怒っているというよりあきれているようだった。

「悪かった。」

許してくれ何でもする」

海人は引つ張られながら頭を下げた。

その言葉に反応して2人は一斉に海人から離れた。

「ほんとう?」「ほんとですか?」

希海と麗華の声は見事にシンクロしていた。

海人はどこか後悔していた。

2人にそれを言うのは間違いだったと。

「お手柔らかに頼むぜ?」

海人は少し顔をひきつらせながら言った。

二人は少し笑っていた。

海人はそれを見て覚悟をした。

というか決めた。

もう二度と二人に何でもすると言わないことを。

ちなみに、そのあと海人は二人にこき使わせられたのだった。

「体が痛い」

海人はつぶやきながら部屋で寝ていた。

二人には海人に料理の手伝いやら買い物の手伝いやら拳句の果てに掃除までやらせた。

でも、海人はそんな日常に近いことが幸せだった。

いままで海人はこんなふう友達と会話することがなかった。

しかし、今ではたくさんさんの友達に囲まれている。

だからこそ、?今?を守りたかった。

海人はふとカレンダーを見た。

カレンダーには5月と書かれていた。

「もうすぐ夏休みか」

海人の学校は基本的に夏休みが早い。

その理由は海人にはわからないがとりあえず早いらしい。

6月の6日にある新人戦のは夏休みの中旬に位置する。

そのため夏休みに入っても練習する人は多い。

ちなみに新人戦で負けた人は残りの夏休みを定期的に来てそれで居残り練習させられるらしい。

なので基本的にこれは長期休暇というより長期練習に近い。

「詳しくは聞いてみるしかない」

海人はそう言つてベットに腰を掛けた。
よく見ると時間はもう10時になっている。
海人はため息をついて布団に入った。

「次の日」

「ねむ」

海人は起きた。

時間的には学校が始まる。

ちなみに、昨日あの事件が起きたところはすべて魔法の力で修復された。

それと、昨日の犯人も捕まった。

あのあとは励と浩太はその場で寝てしまい麗華と希海は海人を使い朋和は妹の所に行った。

学校も落ちつき何より今の所普通に生活が来ている。

ただ、問題点がいくつか出てきた。

1つ目は、海人のこと。

海人自身は自覚がないかもしれないが身体能力の飛躍的上昇は誰から見てもわかることだった。

それを踏まえると海人に関してはいつか何らかの方法で実験が行われる可能性が高い。

2つ目は、この学校のこと。

この学校では何かが行われているということ。

その何かの所為で今回の事件が起きたということ。

それと……。

「俺は狙われている」

海人は自分自身で分かっていた。

これはただの予感でしかなかった。

海人の第六感はその告げていた。

「今は、様子見か」

そう言つて海人は学校に行った。

学校の道筋は長いようで短い。

海人はゆつくりと歩いていた。

しばらく歩いていると1人の女の子がいた。
その女の子には見覚えがあった。

「先生なにやってすか？」

ドール、最近来た先生だ。

「ええ？」

私わあ……きれいな桜をみてるんだよあ？」

「もうほとんど散ってますけど？」

海人の言ってることは嘘ではない。

現にもうほとんどの桜が散っている。

「そうだねえ」

ドールはどこか憂い目で見た。

「そういえば——」

海人は夏休みのことを聞こうとした。

「なあに？」

しかし、その眼を見てやめた。

何故か聞いてはいけないようなそんな眼していたからだ。

「いえ、なんでもないっす」

そう言つて海人は歩き出した。

海人に歩幅を合わせてドールも歩き出した。

ドールは背が低い。

海人ですら背が低いのにそれより低い。

見た目は低学年に近いくらいだ。

海人はドールに目を向けずに言った。

「何ですか先生？」

ドールは何も言わない。

ただただ海人の歩幅に懸命に合わせている。

その姿は兄について行こうとする妹にも見える。

「はあ」

海人はため息をつき歩く速度を下げた。
すると、ドールは海人を見た。

「どうしたのあ？」

ドールは不思議そうに海人を見た。

「そつちこそ、道違いますよ？」

教師は教師で朝は会議あるんじゃないですか？」

海人の一言に「そうかあ」と言った。

しかし、道を変える気配はない。

「まあ、いいですけど……」。

ところで、なんでここに来たんですか？」

海人はとりあえず適当に話してみた。

ドールはうーんとうなってから言った。

「私わゝあなたに会いに来たんだよあ？」

突然だった。

海人は驚いた。

ドールは笑顔だった

そこに、浩太が来た。

「おい、海人何してんだ？」

海人は「おう」と答えた。

「じゃあ、またあとでねえ。」

九十九 海人君」

そう言つて駆け足でいなくなった。

「何話してたんだ？」

海人よ」

浩太は海人に近づきながら言った。

海人は浩太に作り笑いをしていた。

「なんでもねーよ」

そう言つて二人で学校の道筋を歩いた。

ちなみに、麗華は学科が違つたためこつち方面ではない。

「麗華ちゃんと希海ちゃんがないな」

やはりそれに気づいたのか浩太は海人に聞いた。

海人は答えた。

「麗華は学科が違うしそれに昨日は疲れていたからおそらく俺の所にはこれないし。」

希海は先に学校にいるかもしくは完全にこないかだ」

俺が答えると浩太は「はあ」とため息をついた。

「俺のお嬢様は来るなとさ」

浩太は嘆息して言った。

海人は苦笑しながら言った。

「霞さんか」

海人は靴を履き替えた。

「お前が？さん？を付ける意味も分かる」

浩太はまた嘆息した。

そんまんま教室に向かった。

二人の会話は普通のものだった。

そして、教室についた。

「おはよう」

先に励がいた。

励は梓乃と話していた。

励の護衛対象者は梓乃だ。

梓乃はこっちの存在に気付くと手を振って「おはよう」と言った。

海人と浩太は同時に「おはよう」と二人に返した。

そのあとは何事もなくHRが始まった。

ちなみに、希海も麗華も今日は検査の為休みらしい。

海人は安堵の息をついた。

そして、HRではこんな話をしていた。

『6月の6日に新人戦がある。

それに備えろ。

それから、夏休みは1週間後だ』

ということ。

入学してすぐ夏休み。

だが、その夏休みはあるようでない。

それは毎回いわれているらしい。

海人はそのHRを聞きながらため息をついた。

「夏休み……早くね？」

そう呟いて窓の外をみた。

窓の外では元気に鳥が羽ばたいていた。

「????」

「なるほどね」

煙草を吸いながら死銃はどこかの地下室にいた。

「これを隠したかったのか」

死銃はそう言って嗤った。

「6月6日、地獄の始まり……だ」

そう言って死銃の姿は消えた。

第拾肆章 過去の清算 ビョウイン

第拾肆章 過去の清算 ビョウイン

「夏だ!!」

海だ!!!!

美少女だああああ!!!!!!!!」

浩太は教室で咆哮していた。

「まあ、夏まではあと少しだしな」

励は呆れたような顔をしている。

ちなみに、テンションが上がっているのは浩太だけだ。
なぜなら、夏には一大イベントの新人戦がある。

この新人戦でいい成績を出せなかった場合居残りとなる。

「……静かにして」

霞は浩太に言った。

浩太は「ハハハッ、誰が——」とまで言いかけて動きが止まった。
ちなみに、霞のいるのは浩太の後ろ。

浩太はなぜか青ざめていた。

「静かにする?」

霞は静かに言った。

ちなみに、浩太は顔が真っ青だ。

補足すると励は目線を合わせないようにして海人はポーカーフ
エイスでおとなしくしていた。

「……します」

浩太は手を上にあげて言った。

すると、霞は少し笑って椅子に座った。

「あははっ、霞お嬢様さすがに……この浩太ナイ——」

浩太は何かを言いかけて停止した。

全く動かない。

ただただ微妙な笑顔を浮かべているだけだった。

「浩太は少しおしゃべり」

静かにそう言った。

励と海人はため息をついてから適当な会話をした。

「そっいや、梓乃は？」

海人は励に聞いた。

励は少し笑ってから指をさした。

その先では梓乃が机に伸びていた。

「なるほどな」

海人も少し笑った。

海人と励は2人で笑った。

そのころ、希海と麗華は病院にいた。

「私たちは何をやってるのかしら？」

希海は不思議そうな顔をしていた。

なぜならレントゲンを撮っているからだ。

「骨をとってるんですよ？」

「骨??？」

希海はレントゲンをしらない。

それほどもでのことをしたことがないからだ。

「レントゲンっていうんです」

「へえ」

それを聞いてその機会を子猫のような目で見つめた。

「それより、兄さんは何をしてるんでしょうね？」

「多分だけど……あいつは変わらないわよ」

「ですね」

2人は仲良くレントゲンを撮っていた。

教室

「遅いな」

海人は廊下にいた。

麗華はともかく希海の帰りが遅い。
いくら検査といえど4時間は遅い。

しかも施設はこの学校にある。

それを考えると4時間はかかりすぎている。

「行くか」

そう言つて一人で施設に向かった。

その途中、死銃とすれ違った。

海人は振り返った。

死銃も海人を見ていた。

「こんにちは、海人君」

死銃はニツコリと嗤った。

海人は一言「こんにちは」と言つて歩き出した。

海人が振り返つたのには理由がある。

（あいつ……死臭がした）

それは、動物が死ぬ時の独特のにおいだ。

（気のせい？か……）

海人は歩き出した。

施設に向かうために。

海人は施設に向かった。

「失礼します」

海人は施設のドアを開いた。

そこは開けていて白衣を着た人がたくさんいる。

「どうしたんですか？」

「あ……希海、お嬢様の護衛の者です」

海人はなるべく丁寧と言った。

「わかりました。」

「ご案内します」

そう言われて病室に案内された。

「ここです」

「ありがとうございます」

案内人の人は去って行った。

海人は、「入るぞ」と言って病室に入った。

海人は病室を開けて固まった。

病室には2人がいる。

何故か2人が下着姿でいた。

「あ……え？」

希海と麗華も驚いて口をパクパクさせていた。

海人は2人の姿を見てから「すまん!!」と言ってドアから高速で出た。

(……何時の間に、黒と白……麗華はあんなに、希海も結構、じゃない!!)

「馬鹿野郎、俺は何を考えてるんだ!!」

海人は頭を振った。

「……兄さん、入っていいですよ？」

麗華が小さな声で言った。

海人は「お、おおう」と言って病室に入った。

海人は2人の姿を見た。

(2人は制服を着ているがさっきの下着姿が容易に想像できる……俺は変態か!!)

海人はそう思いつつ2人に話しかけた。

「い、行こうか？」

2人は動かずに下を向いていた。

「えっ……と」

海人は2人に近づいた。

あと1mと言うところで海人は止まって2人に言った。

「教室に——」

海人が言い終わる前に海人の視界が揺らいだ。

「へ？」

海人は気づくと床の上に寝ていた。

そして、なぜか重い。

海人は自分の体を見ると……。

「うゝゝゝ」………

唸っている希海と静かに顔を赤らめながら海人を見る麗華がいた。

「えつと……すまん!!」

海人はとりあえず誤った。

すると、2人は……。

「……そんなに、醜かった?」「……そんなに、嫌でした?」

2人で違ったことを聞いてきた。

海人はとつさに。

「2人ともいい体してたよ!!」

全力で答えていた。

そして、海人は後悔した。

(……そうか、俺は何時の間にかここまで変態になってたんだな)

海人はそう思った。

「ほんとに?」「ほんとですか?」

2人の顔は輝いていた。

海人は想像した。

(もしも、『いや……そうでもなかった』と言った場合)

「兄さんなんか嫌いです!!」

「海人はもう近づかないで!!」

(俺、自殺するかも)

そう考えた末に海人は言った。

「もちろんさあ!!」

結局その後看護婦が来るまで海人は押し倒されていた。

「えへへ」

希海は教室でご機嫌だった。

ちなみに、海人は微妙にやつれていた。

なぜなら看護婦さんに……。

『二股は気を付けてくださいね？

かの有名な誠氏二の舞にならないよう——』
とかなんとか言われたからだ。

ついでに言えば麗華もご機嫌だった。

そして、その日は2人ともご機嫌だった。

「明日は、幸せでいられますように」

そして、この日は何事もなく終わった。

そして、夏休みまであと5日となった。

ちなみに、新人戦までは残り1か月くらいとなった。

「準備はもうすぐできるよ」

瑛瑯者は少女と二人で学校の上にあった。

「そうですね……待ってていてください。」

九十九 海人」

第壱拾伍ノ章　過去の清算　ドール

第壱拾伍ノ章　過去の清算　ドール

朝から麗華と希海の機嫌は最悪だった。
ちなみに海人は理由を分かっている。
それは、朝にさかのぼる。

「朝」

「ふあああああ」

海人は欠伸をしていた。

ちなみに、今海人は起きた。

しかし、海人は朝は滅法弱い。

「うう」

海人は基本的にここで二度寝する。

そして、ぎりぎりで誰かに起こされる。

そして今日は……。

「おきてえ、かいとお」

海人は眠い目を擦りながらおこしに来た人を確認した。

（えっと？　誰だ？）

海人はおこしに来た人を見て誰かわからなかったがそのまま無視してもう一度寝る体制に入った。

「むう……せつかく先生が起こしにきたのにい」

海人はその声を聴いて目を開けた。

そこには、ドールがいた。

海人はドールを確認してからもう一度寝た。

「……一緒に寝ちやうよお？」

海人はほとんど寝ていた。

海人は基本的に朝は全くの意識がない。

ちなみに、ドールが海人のベッドに忍び込んでいることにも気づいていない。

「かいとおゝこっちむいてよお」

ドールは海人の頬をつついた。

海人は無邪気な顔をして寝ている。

「……ほんとうにいい、どこがあくまなのかなあ？」

ドールは笑顔だった。

それは、いままで一緒にいた2人でも見たこのないような純粋な笑顔だった。

「すう……すう……」

海人は寝返りを打った。

そして、その先にはドールがいる。

ドールはとっさのことで反応できずそのまんま抱きかかえられるような形になった。

「え？」

ドールは困惑している。

はたから見たら完全に海人がドールを思いっきり抱きしめているように見える。

「あ、ううゝ」

ドールは赤面していた。

ちなみに海人は寝ている。

「えつとお？ おきてるのお？」

ドールは赤面しながら言った。

今のドールはただの少女だった。

「ねえ？」

ドールがそう言っていると突然足音が聞こえてきた。

ドールは抵抗しようとした。

すると……

「あったかい」

海人はそう言いドールをさらに抱きしめた。

ドールは顔を真つ赤にして何もしやべらず口をパクパクさせていた。すると同時に海人の部屋の扉が開いた。

ドールには誰かは確認できない。

でも、悲鳴はきこえた。

約二名の悲痛の叫びが。

「……………」

「……………」

麗華と希海は黙っている。

ちなみにドールはその後海人が起きた後高速で逃げた。

浩太と励はというと。

「私たちはいません」

「イマセン」

謎の現象に陥っていた。

原因？ である海人はというと。

「……………ごめん」

さつきから理由もわからないまま謝っていた。

海人自身には全くの記憶がないので海人は2人の怒っている理由が自分ということだけしかわからなかった。

また、それが寝ている間に起きたことだということも。

海人はただひたすらに謝りながら学校に行った。

この日、二人が機嫌を直したのは放課後の話だった。

〈放課後〉

あたりには練習をしている生徒がいる。

「兄さんは練習しないんですか？」

麗華は海人の顔を覗き込むようにして見ながら聞いた。

「あー、そう言えばな……そのうちすると思う」

海人はそう言つて頭を掻いた。

そして、海人の横にいる希海は言った。

「そうね、そろそろ何かしらの手を打たないと今度こそあの生徒会長に負けるわよ?」

希海は少し含みのある笑顔で言った。

海人はそれを見て少し笑ってから言った。

「大丈夫さ、負けはしないようにするしい練習相手見つけるからさ」

海人はそう言って歩くペースを落とした。

それには理由があった。

目の前にドールがいたからだ。

「じゃああ……さあ、わたしとれんしゅうしない?」

海人は驚いた。

何も言えず本当に驚いていた。

それはここにいる全員が驚いていた。

全員と言ってもいるのは希海と麗華と浩太と励だけだ。

梓乃と霞はここにはいない。

二人は今日は車で帰ったからだ。

寮生活である励と浩太は車に乗っても意味がない。

なので、一緒に帰ることになった。

そのため二人はいない。

「だめえ?」

ドールは海人の顔をしたから覗き込んだ。

海人は一息ついてから。

「流石に強い奴じゃないと戦う意味がない」

海人は少し皮肉そうに言った。

するとドールはくすくすわらってから言った。

「わたしはあゝつよいよあ?」

海人はそれを聞いて笑った。

海人は言った。

「じゃあ、今試してみるか」

海人はそう言って構えた。

その構えは隙だらけだった。

誰からどう見ても隙だらけだった。

でも、ドールは動かず言った。

「わたしわぁ……下がればいいのかなぁ？」

それは、突然だった。

ドールは一步下がった。

麗華と希海は訳が分からず海人の横に突っ立っていた。

浩太も励も意味がわからないと言ったところだ。

しかし、海人は分かっているようだった。

海人は言った。

「面白れえ……」

そしてその頃……。

く????

「お嬢様は何をやってるんですかね？」

「おそらくいつものだろう」

「そうですね……まあ、早く帰ってきてくれることを願うまでです」

「そうだな」

「今からが……過去の清算の準備なんですから」

「……そうだな。」

過去の清算のハジマリだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8016p/>

護ル為ノ | 剣《チカラ》

2011年10月8日11時45分発行